



CSRレポート 2013



# 会社概要 (2013年3月31日現在)

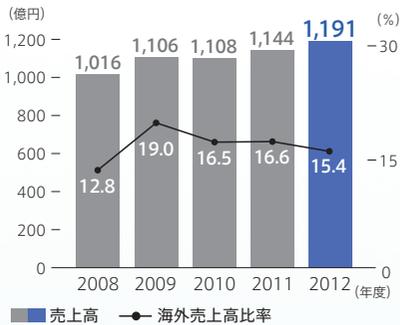
社名：参天製薬株式会社  
 本社：〒530-8552 大阪市北区大深町4番20号  
 グランフロント大阪 タワーA (受付25F)  
※2013年6月17日より、本社機能の一部を移転

創業：1890年  
 資本金：7,081百万円  
 従業員数：3,050名 (単体:1,903名)

## 〈事業概要〉

参天製薬グループは、日本をはじめ、アジア、欧州、北米の各地域において、医療用眼科薬の研究開発・製造・販売を中心にグローバルに事業を展開しています。医療現場における各地域の特性を十分に考慮し、医師・薬剤師とともに、患者さんの治療に貢献できる製品を提供し続けることが、私たちの使命と考えています。

### 売上高および海外売上高比率



### 営業利益および営業利益率



### 研究開発費および研究開発費対売上高比率



事業別売上高構成比

- 医療用眼科薬 83.1%
- 医療用抗リウマチ薬 8.3%
- 一般医薬品 5.4%
- 医療機器 1.9%
- その他 1.3%

事業領域	国内市場シェア	国内地位
医療用眼科薬	35.3%	1位 <sup>※1</sup>
医療用抗リウマチ薬	39.7%	2位 <sup>※1</sup>
一般医薬品	19.1%	2位 <sup>※3</sup>

<sup>※1</sup>：2012年度の国内市場シェアおよび国内地位：抗リウマチ薬は疾患修飾性抗リウマチ薬 (DMARDs) <sup>※2</sup> 市場での国内シェアおよび国内地位 (出典：IMSデータに基づく参天製薬分析)  
<sup>※2</sup>：関節リウマチの病因の一つとされる免疫異常を是正することにより炎症を鎮静化させ、抗リウマチ効果を発現させる、原因療法に一步近づいた薬剤の総称  
<sup>※3</sup>：2012年度の国内一般用点眼薬市場でのシェアおよび国内地位 (出典：参天製薬集計資料)

## 参天製薬の歴史

### Chapter1 「大学目薬」の誕生

参天製薬の創業は今から120年以上前にさかのぼります。現在、眼科薬 (目薬) の売上高が全体の8割以上を占め、国内トップ、世界有数の眼科薬メーカーとなった参天製薬ですが、その始まりは意外にも目薬ではありませんでした。そして、創業から9年後、初期の成長を支えたヒット商品、「大学目薬」を発売。初代製品の発売から100年以上が経過した現在でも、日本でいちばんのロングセラー目薬としてそのブランドが引き継がれています。

#### 1899(明治32)年「大学目薬」を発売

明治初期、来日した外国人医師は一律に日本人に眼病が多いのに驚いたといいます。それほどまでに当時、日本には目薬に対する大きな需要があったのです。そこに登場したのが、「大学目薬」。「世の進むに従い、目薬にもこんな立派なものがありました」という自信に満ちあふれた宣伝コピーと、権威ある大学教授をイメージさせる、ひげとメガネの博士の商標で、たちまち日本全国に広まりました。



### Chapter2 目薬に特化

第二次世界大戦の戦災により本社および大阪市内3工場を焼失し、苦難の時代を迎えます。この苦境を乗り切ったのは、いち早く目薬事業への特化を打ち出し経営資源の集中を行った決断力と先見性でした。

#### 1952(昭和27)年目薬中心の事業戦略で会社再建を図る

1952(昭和27)年「大学ペニシリン目薬」、1953(昭和28)年「大学マイシン目薬」、1954(昭和29)年「大学スーパー目薬」を発売。



### Chapter3 医療用が中心に

医療用医薬品の「チモブロール」「タリピッド点眼液」「リマチル」などの新薬が相次ぎ、急成長期を迎えます。それに合わせて事業も拡大し、大阪に中央研究所、石川県に能登工場を開設、さらに全国各地に営業所を新設するなど、国内拠点の拡充を進めました。

### Chapter4 新たな成長ステージへ

国内の医療用点眼薬事業で築いた基盤をもとに、海外事業展開を積極化。1993(平成5)年米国、1994(平成6)年ドイツ、1997(平成9)年フィンランドに拠点を設立したのをはじめ、現在、世界10カ国に13拠点を構え、臨床開発・製造・販売を行っています。

## 編集方針

●本報告書は、参天製薬および国内外のグループ会社のCSRに対する考え方や取り組みについて、多様なステークホルダーの皆様にはわかりやすくお伝えするための年次報告書です。

●本報告書では、参天製薬グループの社会的責任を果たすための取り組みの全体像を簡潔に報告することを重視し、活動の要点をまとめました。詳細は、当社ウェブサイト「CSR (社会的責任)」に掲載しています。

(<http://www.santen.co.jp/ja/csr/>)

●今年度は「当社事業が担うCSR」をより広範な視点からご紹介するために、当社の4事業部門と生産拠点の事業活動が社会に果たしている役割に焦点をあてた特集ページを設けました。

●実践報告のページでは、ISO26000の考え方を取り入れ、当社が持続可能な発展への貢献を最大化するために定義した7つの「CSR推進中核領域」に沿って報告をまとめています。

●今年度の実践報告は、CSRマネジメントによる計画的な取り組みをご報告することに注力し、中期活動テーマに準じた計画の達成状況と評価、課題を一覧していただけるよう工夫しました。また、活動のハイライトを抜粋し、記録写真や図表を添えて取り組みの状況をより具体的にご紹介しています。

●CSR実践活動に対する社内の意識の変化や今後の課題について、CSR委員会の5人の推進委員による意見交換の内容を、ステークホルダーダイアログとして掲載しています。

## 対象範囲

国内では、参天製薬の全事業所および国内子会社の株式会社クレールを対象としています。海外においては、サンテン・オイ、サンテン・インク、参天製薬(中国)有限公司、韓国参天製薬株式会社、サンテン・エス・エー・エスの一部子会社を含んでいます。

## 対象期間

2012年4月1日～2013年3月31日

(一部2013年4月以降も含む)

## 参考にしたガイドライン

報告書の作成に当たっては、環境省「環境報告ガイドライン2007年版」、GRI「サステナビリティ・レポート・ガイドライン第3版」を参考にしています。また、当社CSR体系の再構築には国際標準化機構「ISO26000」の考え方を取り入れています。

## 次回発行予定

2014年9月



## CONTENTS

CSR REPORT 2013

### TOP MESSAGE

代表取締役社長兼CEO 黒川 明 03

### 特集 参天製薬の事業が担うCSR

〈1〉医薬事業「医療用眼科薬」 05

〈2〉医薬事業「医療用抗リウマチ薬」 07

〈3〉サージカル事業「手術用医療機器」 09

〈4〉薬粧事業「一般用医薬品」 11

〈5〉プロダクトサプライ拠点 13

参天製薬グループのCSR 17

### 実践報告 (CSR推進中核領域)

I CSRマネジメント 19

II 適正な製品・サービスの提供 21

III 公正な事業取引 25

IV 人権尊重 25

V 労働・安全衛生 27

VI 環境保全 29

VII 社会貢献 31

ステークホルダーダイアログ 33

中期活動方針 37

第三者意見 38

# 世界の患者さんの QOL向上に貢献するために

参天製薬は「天機に参与する」という基本理念のもと、世界中の人々の目とからだの健康に貢献することをめざし、事業活動を行っています。患者さんと患者さんを愛する人たちのQOL (Quality of Life : 生活の質) 向上のために、経営はCSR活動の推進を重視しています。

## 世界で存在感のある スペシャリティ・カンパニーをめざす

参天製薬は、長期的な経営ビジョンとして、2020年までに「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」の実現をめざしています。世界中の患者さんの治療に貢献するために、長年にわたり培ってきた目とリウマチ領域における経験や専門的知見を活かし、研究開発、製造、販売・マーケティングに力を注いでまいりました。

患者さんと医療関係者の方々の治療に広く貢献していくためには、患者さんのニーズを満たす医薬品を迅速に開発し、より多くの患者さんに届けることが求められます。特に、眼科領域では、網膜疾患や角結膜疾患を中心に治療が未充足な領域が存在し、世界では新しい治療薬を待ち望んでおられる患者さんが多くいらっしゃいます。こういった方々にできるだけ早く医薬品をお届けするために、当社では、アライアンスを含め、他社とのネットワークを活用した研究開発のスピードアップに力を注いでいます。さらに、より多くの国と地域の患者さんのニーズを満たすためには、当社が有する日・米・欧・アジアの拠点の連携を最大限に活用し、各国の医療環境や制度、医療ニーズの理解も深めています。

## 参天製薬グループへの 基本理念の浸透

参天製薬がめざす2020年に向けた長期的な経営ビジョンの根幹となっているのは、社名の由来でもある当社の基本理念、「天機に参与する」に他なりません。基本理念の中で謳われている「参天ならではの知恵と組織的能力を培い、患者さんと患者さんを愛する人たちを中心として、社会への寄与を行う」ことを事業活動の中で常に追求しています。事業活

動を通じて、優れた製品・サービスを提供し、世界の患者さんのQOL向上に貢献することが当社の使命であり、生命関連企業である当社の事業そのものが、社会的責任を担っているのです。

スペシャリティ・カンパニーとして、その使命を果たすためには、治療現場のニーズをより深く理解し、顧客である患者さんや医療関係者のニーズに合致した検査、診断、治療、製品を含むトータルな情報提供をこれまで以上に充実させることが重要であると考えています。

## 世界の患者さんの 治療ニーズに応えるために

参天製薬は、世界の患者さんのQOV (Quality of Vision : 視覚の質) 向上に向けて、これからも真に求められる製品の創出、情報・サービスの提供に全力で取り組んでまいります。例えば、治療の未充足ニーズが最も高い網膜疾患領域では、滲出型加齢黄斑変性を適応症とした治療剤「アイリニア」を導入し、少しでも多くの患者さんに新たな治療選択肢を提供できるよう、全社一丸となって情報提供、普及促進活動を進めています。また、白内障患者さんの治療に国内では年間100万眼以上使われている眼内レンズにおいても、透明性に優れた独自の製品を展開することで、患者さんのQOVが大きく向上することをめざしています。

今後も、経営とCSRが一体となり、世界中の患者さんの目とからだの健康に貢献し、社会的使命を果たすために努力を続けてまいります。引き続き、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2013年9月



参天製薬は、企業市民として社会が抱える多様な課題に向き合い、社会的責任を果たしてきました。そして日本の社会はいま、東日本大震災からの復興という長期に及ぶ課題を抱えながら歩み続けています。当社は、常に被災地の現在に心を傾け、震災に遭われた方々の思いに少しでも近づきながら、自然災害に対する意識を共有し、被災地復興への貢献に努めてまいります。

代表取締役社長兼CEO

黒川 明

# 未充足ニーズが最も高い 網膜疾患領域の 加齢黄斑変性治療に貢献する 眼科用VEGF<sup>\*1</sup>阻害剤「アイリーア」

(アイリーア硝子体内注射液)

加齢黄斑変性(AMD)<sup>\*\*2</sup>は、加齢に伴う網膜黄斑部(下図「眼の構造」参照)の変性疾患です。なかでも滲出型<sup>\*\*3</sup>AMDは進行が早く、急速な視力低下が生じ、高度な視力障害に至ることもあるため、早期治療が必要とされます。しかし、社会の高齢化とともに患者さんは増加し、治療薬のニーズが高まっています。「アイリーア」は、バイエルヘルスケア社(独)とリジェネロンファーマシューティカル社(米)が共同開発した、滲出型AMD治療のための新薬。バイエル薬品と販売提携し、2012年11月より日本で発売を開始しました。未充足ニーズの高い後眼部領域へ参天製薬が提供する初めての医療用医薬品であり、患者さんのQOL<sup>\*\*4</sup>向上に貢献することが期待されています。



※1: VEGF=Vascular Endothelial Growth Factor(血管内皮増殖因子)は生体内に存在する天然のタンパク質で、滲出型AMDにおいては眼内における血管の異常新生にも関与し、血管透過性を亢進させ浮腫を誘発する

※2: 加齢黄斑変性(AMD)=Age-related Macular Degeneration

※3: 滲出型(しんしゅつがた)=血液の中の水がにじみ出てきて、黄斑に障害が生じる型

※4: QOL(Quality of Life)=生活の質

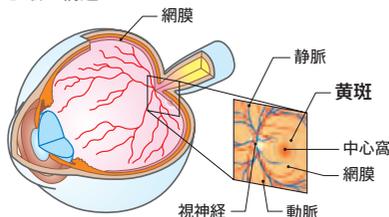
## 倍増している患者さんの一方でごくわずかな治療実態

2007年の調査では、AMDの推定患者数は69万人と9年前の調査の約2倍に急増。50歳を超えると加齢に伴って増加し、70歳以上に多く見られます。網膜の中心に障害が生じるため、最も見たいところが見えなくなり、患者さんの生活に大きな支障をきたす難病です。治療法は

この10年間で大きく進歩しましたが、治療を行っている医療機関は限られており、治療を受けている患者さんはごくわずか。治療が必要な患者さんへの対応が大きな課題です。さらに、遠方の医療機関へ通院している患者さんの中には治療を断念される場合もあり、医療機関と治療薬の拡充が待たれています。

「アイリーア」は、滲出型AMDの治療薬として大きな役割を果たしている眼科用VEGF阻害剤の一つで、さらにこれまでの薬剤にはなかった「計画的投与」という、患者さんの負担軽減につながる治療概念を導入した新しい薬です。

### ●眼の構造

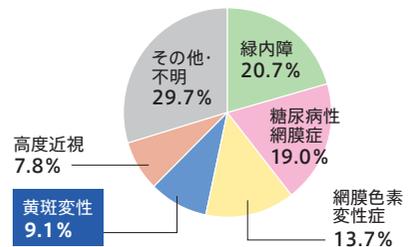


### ●加齢黄斑変性患者数の推移(推定)

	1998年	2007年
日本人50歳以上の人口	約4,300万人	約5,300万人
	↓0.9%	↓1.3%
加齢黄斑変性	約37万人	約69万人

推定患者数は9年間で約2倍に急増している

### ●日本人の視覚障がい(2005年)



出典: 厚生労働省 難治性疾患克服研究事業



2012年11月から日本で発売を開始した眼科用VEGF阻害剤「アイリーア」



「アイリーア」販売提携契約締結後、握手するバイエル薬品のセバスチャン・グート社長(左:契約当時)と当社社長・黒川明

## 「アイリーア」に寄せられる大きな期待

これまでの治療法とは異なる「アイリーア」の「計画的投与」は、維持期において通常2カ月に1回の投与を基本とするもので、滲出型AMD治療に新しい選択肢を提供することとなりました。発売が最も早かったアメリカでは「計画的投与」が治療の主流になりつつあります。また、国内においては新しい治療法とし



発売翌日、いち早く開催された特約店への説明会

て先生方の関心の高さもあり、「アイリーア」は驚くほどのスピードで市場に浸透しました。発売から数カ月間で滲出型AMD治療を実施している主要施設の大半に採用されたことは、患者さんのQOL・QOV<sup>※5</sup>向上を願う医療現場の熱い想いを物語ります。

「アイリーア」の「計画的投与」は、これまでにない治療概念であり、治療効果を最大限発揮させるためには、先生方とMRとのコミュニケーションが重要な鍵となります。MRは、患者さんにとっての課題や医療現場での課題などを幅広く理解し、十分な情報提供活動を行っていくことが欠かせません。

※5:QOV(Quality of Vision)＝視覚の質

## 新薬に学ぶ真の顧客ニーズとスペシャリティ・カンパニーとしての責任

滲出型AMD治療の現場では、初診時の視力の改善を目標とする治療、治療開始後に改善された視力の維持を目標とする治療といったように、患者さんの状態に応じて適切な治療方法を選択する必要があります。患者さんは大切な視力を少しでも改善したいという強い願いをお持ちであり、私たちは、このような患者

さんのQOL向上に貢献するために患者さんの視点に立って、患者さんのニーズに耳を傾けながら、参天製薬ならではの情報やサービスを提供していきたいと考えています。

「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」をめざす当社にとって、「アイリーア」は、未治療・未充足ニーズが高い網膜疾患領域における治療への貢献に向けた第一歩です。この領域での治療ニーズをより深く理解し、必要とされる情報を迅速に提供していくことが私たちの社会的責任。そして「アイリーア」で学んだことを、新たな製品開発に結びつけていかなくてはなりません。



参天製薬ならではの情報やサービスを提供するための個別研修

日本大学医学部眼科学教授  
駿河台日本大学病院 病院長  
日本網膜硝子体学会 理事

湯澤 美都子先生  
(専門分野:網膜疾患、黄斑疾患)



## 新薬の開発のみならず、患者さんと治療の懸け橋となることに期待しています

人間は情報の80%を目から受け入れており、QOL (Quality of Life)の維持に「見えること」は欠かせません。目は10円玉ほどの小さな臓器ですが、その中でもカメラのフィルムにあたる網膜は「見えること」に重要な役割を果たしています。

加齢黄斑変性は、加齢にともなって網膜に何らかの異常をきたした状態のことで、「滲出型」と「萎縮型」に分けられます。難病情報センターの調査(2007年)によると、推計患者数は69万人で9年前(1998年)の約2倍に急増しており、国内における中途失明原因の第4位となっています。

近年開発された眼科用VEGF阻害剤は滲出型の加齢黄斑変性に有効で、患者さんの視力改善が期待できることから治療の第一選択薬となっています。医療に従事する1人として製薬企業の皆さんには、こうした画期的な新薬開発に期待するとともに、眼科医のすみずみまで行き届く正確で迅速な情報提供をお願いし、優れた治療薬を必要とする患者さんに、より広く、より早く届くことに貢献していただきたいと思います。また、未治療の患者さんが自分の病気に気づいて医療機関に足を運んでいただけるような疾患啓発など、患者さんと治療の懸け橋となるような取り組みにも期待しています。



「アイリーア」による治療効果を最大限発揮するための患者さんや医療関係者向け説明用冊子

より良い薬を待つ人のもとへお届けし、より正しくご使用いただくために

## 関節リウマチのテーラーメイド治療実現に貢献する 抗リウマチ薬と きめ細かな情報の提供

関節や関節周囲の骨、腱、筋肉などに痛みが起きる病気の総称をリウマチ性疾患と呼びますが、一般的にリウマチとは「関節リウマチ」のことを指します。進行すると関節が変形することもあり、日常生活にも支障をきたす病気です。症状や進行の程度は人によってさまざまに異なるため、適切な診断と治療方法の選択が欠かせません。参天製薬は、薬物治療の中核を担う3種類の抗リウマチ薬 (DMARDs※1) ときめ細かな情報の提供を通じて、関節リウマチのテーラーメイド治療実現に貢献しています。

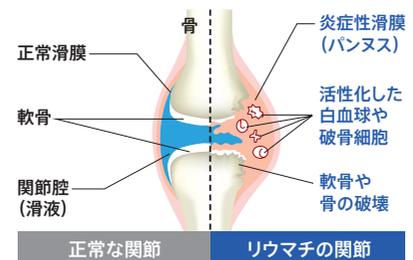
※1: DMARDs (ディーマーズ) = Disease Modifying Anti-Rheumatic Drugs (疾患修飾性抗リウマチ薬)  
関節リウマチの原因の一つとされる免疫異常を是正することにより炎症を鎮静化させ、  
抗リウマチ効果を発現させる、原因療法に一步近づいた薬剤の総称

### リウマチ治療を前進させてきた 薬剤の開発と医療現場の連携

関節リウマチは、免疫異常により免疫システムが自身の身体の一部を攻撃することで引き起こされると考えられています。四半世紀前には治らない病気と考えられ、対症療法が主体でしたが、近年、免疫調節剤や生物学的製剤などの抗リウマチ薬の登場により病態は抑えられ、患者さんのQOL※2も向上しました。さらに、医師、薬剤師、理学療法士が連携しながら診断と治療を行う体制が、日本のリウマチ治療を支えています。

※2: QOL (Quality of Life) = 生活の質

#### ● 自分の身体を攻撃する関節リウマチの病態



#### ● 関節リウマチの薬物治療

炎症・痛み	<b>非ステロイド性消炎鎮痛薬</b> 炎症や疼痛を直接抑え、関節変形でおこっている痛みや腫れを取り去ります。効果は早く現れますが、病気の進行を止めることはできません。
	<b>ステロイド薬 (副腎皮質ホルモン)</b> 炎症を抑える作用が強く、効果が早く現れます。しかしそれは一時的なもので、根本的な治療にはなりません。副作用が強く少量で使用します。
病気の根本	<b>抗リウマチ薬 (DMARDs)</b> 病気の根本の「免疫のはたらき」に作用し、炎症の広がりを抑え、病気の進行を抑えます。発病後早期に使用すると効果がよく現れます。
	<b>生物学的製剤</b> 炎症を起こす元となる微量生理活性タンパク質やそれを作る細胞の働きを抑えます。従来の治療法で効果がない場合に使用されます。

## 薬物治療には不可欠となった抗リウマチ薬(DMARDs)

関節リウマチの基本的な治療は薬物療法です。薬剤は患者さんの症状や進行に応じて、抗リウマチ薬(DMARDs)、非ステロイド性消炎鎮痛薬、ステロイド薬の中から選ばれます。参天製薬は、



新薬の開発に向けた研究

DMARDsの一つ「リマチル」を自社創製し1987年に発売、リウマチ治療に新しい選択肢をもたらしました。現在当社が提供する3剤のDMARDsは、関節リウマチの炎症を根幹の部分で抑える効果を持っているため、薬物治療のベース薬となっています。

従来の治療法で効果がない場合に使用される生物学的製剤の登場で、関節リウマチの治療はさらに大きく進歩しました。しかし、医療コストや薬剤注射の負担などの観点からも、DMARDsは今日の薬物治療において極めて重要な役割を果



当社が提供するDMARDs3剤「リマチル錠」(一般名: プシラミン)、「アザルフィジンEN錠」(一般名: サラソスルファピリジン)、「メトレート錠」(一般名: メトトレキサート)

たしており、患者さんの症状に応じて、複数のDMARDsを使い分けていく方法が関節リウマチ治療の主流となっています。

## 創薬とともに重要な患者さんと医療関係者へのよりきめ細かな情報提供

骨が壊れる前に治療を始めるためにも、関節リウマチは、何より早期発見・早期治療が重要です。また、リウマチの症状は日々変わるため、患者さんと主治医が密にコミュニケーションし、その時の患者さんの状態に最適な治療法、薬、量の調整が求められるようになってきました。

当社は、より優れた治療薬の開発を進めると同時に、今ある薬をより適切にお使いいただけるよう、患者さんにはリウマチ治療に対する正しい情報を、そして医師、薬剤師、理学療法士の方々には、薬の客観的なデータをお伝えしていくこ



MRの学習、情報交換に注力

とが重要な仕事だと考えています。そうした地道な活動を継続していくことこそが、日本では70万人とも100万人とも言われるリウマチ患者さんのQOL向上につながっていくと信じています。

リウマチはどういう病気なのか、その治療法や日常生活などさまざまな情報を患者さんによりやすく説明するための小冊子



小冊子などに記載された「Together」マークは、医師、薬剤師、コメディカルらがチームワークで患者さんを支えておられる様子と、当社DMARDs3剤が治療に貢献していく願いを表現



東京大学医学部  
整形外科学教授  
日本リウマチ学会  
リウマチ専門医・指導医  
日本リウマチ学会理事・評議員

田中 栄先生  
(専門分野:リウマチ外科、骨粗鬆症)

## 患者さんのQOL向上につながる地道な活動も、製薬企業の使命ではないでしょうか

私が研修医だった25年前は社会的にも関節リウマチの認知度はまだ低く、治らない病気という認識から「慢性関節リウマチ」と呼ばれていました。当時は対症療法が中心で、抗炎症剤で症状を抑え、悪化したら手術を行うのが一般的でしたが、その後の薬の進化と人工関節等の技術革新により関節リウマチの治療は劇的に進化しました。薬物療法は、1990年代に登場したDMARDにより、これまでは改善が難しかった患者さんにも効果が現れるようになり、私たち医師は「もっと良い治療をしたい」という思いが強くなりました。私たち医師にとって、患者さんの症状が少しでも改善されることが何よりも嬉しいことです。

関節リウマチは早期診断・早期治療が重要です。また、治療効果を最大化するとともに副作用を最小化するためには薬の適切な使用が鍵となります。製薬会社の皆さんには新しい薬を開発していただくことはもちろんですが、今ある薬の適切な使い方の研究や、情報提供をしていく姿勢が大事だと思います。リウマチ患者さんに対しては、リウマチはどのような病気、どのような治療や薬があり、どのような副作用が出るのか、出産や育児はどうなるのか、社会生活が送れるのかなど、患者さんのQOL (Quality of Life) 向上につながる地道な活動も製薬企業の方々の使命ではないかと考えています。

## 白内障の患者さんが視力を回復するための より優れた眼内レンズ<sup>※3</sup>の 開発と普及

白内障とは、目の中でレンズの働きをする水晶体が白く濁り、視力が低下する病気です。最も多いのは年齢とともに進行する「加齢性白内障」です。初期段階では点眼薬による治療が一般的ですが、生活に支障が出るほどになった場合には、手術によって濁った水晶体の内部を摘出し、代わりに眼内レンズを挿入します。この手術は、既に確立されており、年間で100万眼以上実施されています。この手術により、多くの患者さんの視力が回復しています。参天製薬は、眼科領域のスペシャリティ・カンパニーとして、白内障治療においても透明性に優れた独自の眼内レンズを提供し、患者さんの視力回復、QOV向上に貢献しています。



※1: QOL(Quality of Life) = 生活の質 ※2: QOV(Quality of Vision) = 視覚の質 ※3: IOL(Intraocular lens) = 白内障手術で水晶体を摘出したあとに挿入される人工の水晶体

### 高い透明性で患者さんのQOV維持に大きく貢献する眼内レンズ「エタニティー」

一般的な白内障の手術は、眼球を切開し、濁った水晶体の内部を超音波で碎いて取り出した後、眼内レンズを挿入します。眼内レンズは直径6ミリほどのレンズ部と眼内に固定するための2本の支持部でできています。これを専用のインジェクター（挿入器）に折りたたんで装填し、小さな切開口から挿入。インジェクターから押し出されるとレンズと支持

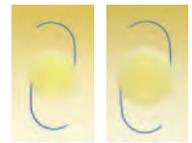
部が眼球内で元の形状に広がり、しっかりと固定されます。これまでのアクリル製のレンズは、移植後のレンズ部の透明度を保つことが重要な課題でした。そこで参天製薬は2008年、移植後も高い透明性を維持するハイブリッド・アクリル素材を使用した眼内レンズ「エタニティー」を開発。患者さんのQOVの維持に貢献する新しい選択肢を生み出しました。

#### ●「エタニティー」シリーズのラインアップ

**2008年「エタニティー」**  
眼内レンズで初めて、ハイブリッド・アクリル素材を使用（光学部径6.0mmと7.0mmの2種類）



**2009年「エタニティー ナチュラル」**  
色感覚の変化や、まぶしさを抑制するためにレンズを着色（光学部径6.0mmと7.0mmの2種類）



**2013年「エタニティー ナチュラル ユニ」**  
レンズ部と支持部を同じ材質で一体成形したワンピースタイプを製品化



#### ●白内障の手術 （眼内レンズの挿入）

水晶体の濁った内部を取り出した後の眼内にインジェクターを挿入。折りたたまれていた眼内レンズは押し出されて、自然に広がります。



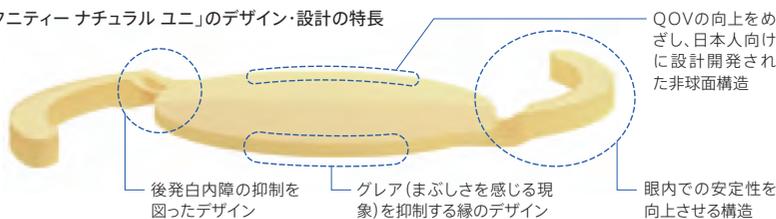
## さらなるQOV向上のために改良を重ね生まれた 新製品「エタニティー ナチュラル ユニ」

高い透明度が長期間にわたって維持される特性は、患者さんのQOVの維持のみならず、眼科医療にとっても画期的であり、眼内レンズの装着後も、高い精度で眼底検査ができるようになりました。特に定期的な眼底検査を必要とする網膜合併症の医療現場では、口径の大きなモデル\*4が選択できる「エタニティー」は高く評価いただいています。

「エタニティー」は発売後も、色感覚の変化を低減させるための着色化や、より使いやすいインジェクターの開発など、患者さん・眼科医双方の声を取り入れて改良を重ねてきました。そして2013年、

※4：口径の大きなモデル  
「エタニティー」「エタニティー ナチュラル」ともに、レンズ口径6.0mmに加えて眼底視認性への貢献をめざして大口徑の7.0mmもラインアップ

### ●「エタニティー ナチュラル ユニ」のデザイン・設計の特長



めざしてきたレンズ部と支持部のワンピース化に成功。より薄いレンズを実現するとともに、患者さんのQOVの向上に貢献するデザインや設計を取り入れた「エタニティー ナチュラル ユニ」を発売しました。同時に発売した専用インジェクター「アキュジェクト ユニフィット」とともに、製品ラインアップを充実させ、より多くの患者さんの視力回復に貢献できるよう、その普及に努めています。

### ●「エタニティー ナチュラル ユニ」 専用インジェクター「アキュジェクト ユニフィット」



カートリッジに設置された「エタニティー ナチュラル ユニ」

## 患者さんと眼科医が求める、より優れた眼内レンズの開発と普及をめざして

眼内レンズで唯一のハイブリッド・アクリル素材は高い透明度を実現しましたが、一般的なアクリル素材より硬く、取り扱いが難しいことが、普及を阻む要因となっています。この製品をより多くの治療に役立てていただくために、「エタニティー」の特長や正しいセッティングの方法などについて、当社SR\*5は眼科医へのきめ細かな説明に努めています。もちろん、柔らかい素材とよりセッティングしやすいインジェクターの開発は喫緊のテーマです。

高齢化が進み、眼内レンズを移植してからの人生が長くなりつつある今、視力の回復のみならず、QOVへの要望がますます高まっています。いつまでも透明であり続ける「エタニティー」が果たす役割は、ますます大きくなっていると考えます。参天製薬は、より良いQOV向上のために、患者さん・眼科医の声に耳を傾けながら、より優れた眼内レンズの開発と普及に力を注いでいきます。

※5: SR (Surgical Sales Representative)  
＝手術用医療機器情報担当者



より多くの眼科医に「エタニティー」を紹介するためのセミナーを開催



for patients, for surgeons  
(患者さんのために、手術医のために) —SRは手術に関する最新の情報提供活動を実施

より多くの眼科医に「エタニティー」をお使いいただくためのわかりやすさを心掛けた取扱説明書



東京歯科大学水道橋病院  
眼科教授  
一般社団法人日本白内障  
屈折矯正手術学会理事長

ビッセン宮島弘子先生  
(専門分野：白内障、屈折矯正手術)



## 患者さんの声に耳を傾け、 私たち眼科医とのより積極的な 連携に期待しています

医療の進歩により平均寿命が延長するとともに、何らかの病気になって治療した後も健やかな生活を送れるようにQOL (Quality of Life) を考慮することが重要となりました。私の担当する眼科医療においては、QOV (Quality of Vision)、専門的には「見え方の質」となりますが、実際には「美しく見えること」を目標に治療計画を立てています。例えば白内障治療では白く混濁した水晶体を取り除く手術を行います。IOLが登場する以前の視力矯正は牛乳瓶の底のような分厚い眼鏡が必要でした。IOLの登場により患者さんはこの分厚い眼鏡から解放されました。IOLはかつての眼鏡に代わるものから、近年では「より自然に見える」、「乱視を矯正できる」、「遠近両用」など日進月歩しており、患者さんのQOVに大きく貢献してきたと思います。

このIOL移植手術件数は年間で120万～130万眼と言われていますが、ライフスタイルが多様な現代においては患者さんのニーズも多様です。これらの多様なニーズに応えるためには、医療現場で患者さんの側にいる私たち眼科医と、優れた技術を持つ医療機器や製薬企業との協働が必要不可欠と考えています。企業の皆さんには患者さんの声に耳を傾けていただき、私たち眼科医とともにさらにQOV向上に貢献できるように積極的な連携を深めていただけることを期待しています。

より多くの人々にアイケアの大切さを知っていただくために



1899年  
(明治32)

参天製薬が初めて発売した目薬「大学目薬」。軟膏が主流で、液体の目薬がほとんどなかった時代に、「直接、滴を目に点す」用法が世に広まるきっかけとなりました。

## 点眼する文化を広め 眼病予防に貢献してきた 参天製薬の一般用目薬

目のかすみ・疲れ・乾きを感じたときなどに、市販の目薬を点眼することは今や一般的となりました。特に日本は世界的にも点眼薬の利用率が高く、アイケアに対する意識が非常に高い国です。しかし、100年ほど前、明治時代の日本では、来日した外国人医師が驚くほど日本人には眼病が多かったと言われています。一般用目薬の普及は、この1世紀の間に点眼する文化を根付かせ、眼病予防に大きな役割を果たしてきたのです。



2013年  
(平成25)

現在の「大学目薬」。時代の要請に合わせて処方改良を行いながら、100年以上にわたり多くのお客さまにご支持いただき、日本一のロングセラー目薬となりました。

### 点眼する文化を広めた 参天製薬の目薬第一号「大学目薬」

日本で点眼薬が普及するきっかけをつくった、1899(明治32)年に発売された参天製薬の目薬第一号「大学目薬」は、利便性を考え、ガラス瓶に点眼用スポイトを付属させたものでした。その後も、1962(昭和37)年に採用した国内初のプラスチック点眼容器に代表されるように、独創的なアイデアを実用化することで、より多くの人が使いやすい製品として改良を重ねてきました。同時に、目のリフレッシュ、コンタクトレンズ使用時の不快感、乾燥、アレルギーなど、さまざまなアイケアの視点を提案。一般用目薬を通して、眼病予防に対する社会的な意識を高めることに注力してきました。

#### ● 参天製薬の一般用点眼薬の変遷(概要)

1962(昭和37)



国内初のプラスチック容器目薬  
「スーパーサンテ」

1985(昭和60)



目のかすみ・疲れに効く  
「サンテ40NE」

1991(平成3)



目に爽快感を与える  
「サンテFX」  
——「キターッ!」のコピーで  
学生から社会人まで

2006(平成18)



有効成分を最大濃度配合  
「サンテメディカル10」

2008(平成20)



40代から急増する目の疲れ・  
目のかすみに対応した  
「サンテ40i」  
——2012年配合成分の見直し、強化

2009(平成21)



爽快感にビタミンなどの  
目の栄養をプラスした  
「サンテFX Vプラス」

2012(平成24)



乾燥などによる角膜のダメージを  
修復・保護して、目の炎症や  
眼病予防に効果を発揮する  
「サンテメディカルガード」

## 時代のニーズに応じてアイケアをアピールする新製品とプロモーション

「キターッ!」のコピーで注目を集めた「サンテFX」は、2012年には人気アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」とのコラボレーションで、より幅広い層にアイケアをアピールする役割を果たしました。近年は、日本人のライフスタイル・生活環境・意識などの変化に応じて、さらに多様なアプローチを展開しています。



「サンテFX」と人気アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」とのコラボレーションキャンペーン

2013年には、女性の瞳のエイジングに着目した「サンテ ポーティエ」、パソコンやスマートフォンからのブルーライトなどによる目のダメージをケアする「サンテPC」などの新製品をはじめ、「サンテFXシリーズ×モンスターハンター4」や「サンテメディカルシリーズ×鬼武者Soul」など、人気ゲームとのコラボレ



「サンテメディカルシリーズ×鬼武者Soul」などで展開した、人気ゲームとのコラボレーション



エイジングに着目した目薬「サンテ ポーティエ」



ブルーライトなどの光ダメージをケアする「サンテPC」

ーションによってさらに幅広い層に対してアイケアの意識を高めるキャンペーンを実施しています。

子どもからお年寄りまで世代に応じた目薬や生活習慣の変化に応じた目薬の開発と、アイケアに関心を高めてもらうための情報発信も、参天製薬の重要な社会的責任だと考えています。

## QOL※向上につながる、薬剤師、店頭販売員に向けた研修

一般用目薬の提供とともに、参天製薬が重視していることは、目薬をより正しく使用していただくことです。そのために当社では、20年以上にわたって、薬剤師、店頭販売員の方々に向けた「ひとみ・すこやか研修会」を開催してきました。

東京・大阪で年に2回、眼科専門医を講師にお招きして、トレンドの眼病、正しい目薬のさしかたなどをテーマに約2時間の研修会を開催し、毎回250名ほどの方に参加いただいています。

眼疾病や服薬指導に関する知識を修得いただくことで、店頭で相談を受けたお客さまに製品の正しい使い方をお伝



20年以上の歴史を持つ「ひとみ・すこやか研修会」

えするとともに、必要時には適切に眼科医につなぐことができます。一般用目薬とアイケアの情報を幅広く提供することで、参天製薬はこれからも、目の健康とQOL※の向上に貢献していきます。

※QOL(Quality of Life)=生活の質



研修会で行われた眼科医による講演内容は、当社ホームページにまとめられ、当日参加できなかった方も読むことが可能



薬粧事業部長  
加田 敏

## 日本の点眼文化の礎を築いた企業としての志を胸に、アイケアへのさらなる貢献をめざして

参天製薬は「大学目薬」によって、日本の点眼文化を切り開いた会社です。私たちはその志を受け継ぎ、現在も時代に合った点眼文化の浸透を図り、眼病予防に貢献することをめざし続けています。しかしながら、日本の一般用点眼薬の市場は、過去10年以上にわたって平衡状態にあります。もちろん、人口動態による影響はありますが、まだまだアイケアの意識が浸透していないのも事実です。例えば、子どもの頃から

歯ブラシの習慣を身につけ、行きつけの歯医者さんがあるように、眼病予防のためのアイケアの習慣が、もっと暮らしの中に根付くべきだと思うのです。

今後は、医療用眼科薬のトップメーカーとしてのノウハウを活かした製品開発にも取り組むと同時に、一人でも多くの人に正しいアイケアの知識と習慣を身につけていただけるよう、他業種とのコラボレーションも視野に入れ、より積極的な活動を進めたいと思います。

いつでも、どこでも、いつまでも、安心して治療を受けられるように

## 国や地域の特性に応じて、 高品質な医薬品を安定供給するための グローバル製品 供給体制の再構築

参天製薬がめざす「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」。それは、世界の患者さんと患者さんを愛する人たちのために、高品質の医薬品を安定供給し続ける企業。その根幹を担うのが生産拠点です。参天製薬は真の顧客ニーズを考え、生産・供給体制の再構築に取り組んでいます。その目標は、顧客の期待以上の製品を、求められる地域に、より早く、より競争力のある価格で供給できるグローバルなデマンドチェーンの確立。生産拠点の新たな挑戦が始まりました。



能登工場(日本)  
世界最大級の点眼剤製造  
本数を誇るマザー工場



滋賀プロダクト  
サプライセンター(日本)  
どんな製剤にも対応する  
グローバル・コアサイト



蘇州工場(中国)  
成長著しい中国をカバー  
し、日本・欧州をバックア  
ップする一貫生産工場



タンペレ工場(フィンランド)  
欧州を中心とする各国へ  
多種多様な製品を安定供  
給するための供給拠点



## 世界の製剤ニーズに迅速に対応するグローバル・コアサイト 滋賀プロダクトサプライセンター

グローバル製品供給体制の再構築に向けて、最も大きな変革を図ったのが滋賀工場です。2012年度末に大阪工場から滋賀工場地区にサプライチェーン企画・管理、生産技術、調達、工場などの機能を集約統合。拠点名も「滋賀プロダクトサプライセンター」と改称し、グローバルな製品供給を実現するグローバル・コアサイト(製品供給中核拠点)として生まれ変わりました。



### 未来を見据えて統合・拡張されたグローバル展開の中核拠点



工場棟と管理棟がガラス張りの渡り通路で結ばれた独特なデザインは、増築された新棟にも継承

世界の4拠点がそれぞれの特長を最大限に発揮することで、生産機能を強化し競争力の向上を実現することが、製品供給体制再構築の主目的です。グローバル・コアサイトとしての使命を担った滋賀プロダクトサプライセンターには、品質管理、倉庫機能、サプライチェーンの企画・管理、生産技術、調達、および工場などの機能を集約統合、さらに治験薬をタ

イムリーに供給できる体制など、中核拠点として必要な多くの機能が集約されました。また、新たな施設には、将来の拡張性を考慮した設計も施されています。大量生産に秀でた能登工場とは役割を明確に分け、自社生産すべき多様な形態の眼科用剤に適切に対応できるラインの準備など、さまざまな製品に幅広く対応できる高い柔軟性を備えています。

## 先進の製造管理・品質管理とグローバル・コアサイトとしての施設環境の充実

滋賀プロダクトサプライセンターでは、製造管理・品質管理システムにおいて、最新のGMP※にも適合することを目標に、「1本の不良品も見逃さない」徹底した管理・教育が実践されています。それによって、規制の厳しい欧米のGMPにも対応した生産拠点として、海外の患者さんが必要とする製品を決して絶やさないための製品供給体制を整えています。

また、既存の滋賀工場が有していた機能との一体化を図りながら、新たにグローバル・コアサイトとしての機能を効果的に付加していくことをめざして、「4

つの環(わ)」をコンセプトに施設としての充実を図りました。それは「動線の環」「時間の環」「環境の環」そして「コミュニケーションの環」です。

「動線の環」とは、従業員の移動を考慮した工場棟や管理棟、新棟をつないだリング状の通路や、効率的な生産ルートのための動線と安全性確保のための車動線のループ化を意味します。「時間の環」とは、滋賀工場の既存デザインとマスタープランを継承・発展させたこと。「環境の環」とは、地球環境への配慮と従業員の安全性を確保した作業環境への配慮です。そして「コミュニケーション



徹底した品質管理は当たり前の基準であるということ、世界中の生産現場で共有している

の環」は、従業員にコミュニケーションを促す空間づくりを意図しています。

※GMP(Good Manufacturing Practice/適正製造規範)：医薬品の製造管理および品質管理に関する基準



点眼剤品質の源とも言える製造用水は、注射用純水レベルにまで精製



生産を担う者自らが、まず世界中の目業を知ろうと、管理棟に設けられた「世界の目業パーク」



効率的な動線に配慮しながら、交流を育む「環」のコンセプトを活かしたオフィス空間

## グローバルに真の顧客ニーズを捉えるための現場志向の挑戦

施設・設備の充実のみならず、滋賀プロダクトサプライセンターに取り入れられた重要な機能は、グローバルに真の顧客ニーズを捉え、実際にそれを形にすることです。工場から「プロダクトサプライセンター」へと名称を改めた理由も、参天製薬がめざすグローバル・コアサイトとは、生産のみならず、世界の患者さんに必要とされる医薬品・サービスの情報を敏感に察知し、少しでも早く製品化して患者さんのもとに届けること

を、重要なミッションとして捉えているからに他なりません。

4つの環の一つ、コミュニケーションを促す空間づくりは、部門間の垣根を取り払い、これまでになかったような異部門メンバー間の情報交換や提案を活発に

しつつあります。なによりもまず、顧客が真に求める製品を競争力を持ってお届けするためにはどうすればいいかを考える。そしてそれを実現する。それが、滋賀プロダクトサプライセンターに与えられた使命です。



蘇州工場の一貫製造GMP取得に尽力後、滋賀工場長に就任した 網 邦延



新築された中央棟オフィスでは、吹き抜けの設計を活かして、朝礼・終礼を日課として行っている

国や地域の特性に応じて、高品質な医薬品を安定供給するためのグローバル製品供給体制の再構築

## 成長著しい中国の医療ニーズに応え、日本・欧州の安定供給をバックアップする一貫生産工場 中国・蘇州工場

蘇州工場は、参天製薬が自社で初めて海外に建設した工場です。2007年に竣工後、急増する中国の眼科医療ニーズに一刻も早く応えるため、まず2008年に中国での分包装のための承認を取得。日本で調剤・充填された中間品を現地で包装し、中国市場に供給してきました。2012年には、一貫製造のための承認を取得。グローバル製品供給体制におけるアジアの重要拠点として、本格的な活動が始まりました。



### 中国・蘇州工場設立の背景と新GMP取得の意義

中国では、高齢化の進展に伴う眼病治療の需要の高まりのみならず、経済成長とともに、より高度な医療へのニーズが急速に高まっています。アジアでの眼科医療に貢献し続けてきた参天製薬に



調剤機をはじめ、無菌製剤の一貫製造が可能な設備機器はすべて日本から搬入

とって、中国の患者さんに高品質の眼科薬をお届けすることは急務でした。しかし、規制の厳しい中国で医薬品の安定供給を実現するには、輸出販売だけでは困難です。中国国内に現地工場を設立することが不可欠だったのです。

また近年、世界では、医薬品の品質や信頼性を高めるために、より厳しい審査基準の導入とその統一化が進められています。中国においても2011年、GMPが大幅に改正され、欧州基準に近いレベルが求められるようになりました。蘇州工場は、この厳しい新GMPを、

江蘇省内で最初に取得。主要な生産設備を日本から搬入し、無菌製剤の一貫製造が可能な日本の工場と同レベルの施設環境を実現していたことが奏功したのです。

蘇州工場が取得した中国の新GMPが、先端のGMPといわれる欧州基準に近い水準となったことは、参天製薬のグローバル製品供給体制においても大きな価値を持っています。それは今後、蘇州工場が日本・欧州に向けた医薬品製造のバックアップ機能を果たすための、確かな基盤となるからです。



2008年から操業を開始していた包装ライン



各種検査や機械の操作など、現地スタッフの現地教育の様子



将来への拡張性も備えた各種ゾーンは、セントラルコリドーと呼ぶ長い廊下で結ばれている

2012年7月、省FDAより認可された「一貫製造GMP」証書



2012年12月、一貫製造による製品「タリビッド」を初出荷

## 患者さんに必要とされる医薬品を少しでも早くお届けするために

一貫製造のための基盤が整った蘇州工場では、2014年に発売を予定している緑内障治療薬「タブロス」をはじめ、主力製品の製造に向けて設備増強などの準備を着々と進めています。その一方で、今も中国各地で良薬を待ち望んでいる数多くの患者さんに必要とされる医薬



生産能力を大きく左右する薬剤の充填機も、より高速なマシンの導入を進めている

品を、少しでも早くお届けするためのさまざまな取り組みを進めています。

その一つは、特に患者さんニーズが高い「タブロス」を、まずは日本からの輸入薬として販売するための申請です。また、日本では扱ってなくても中国では特にニーズの高い製品について、中国独自にジェネリック医薬品として開発する準備を進めています。さらには自社製品に限らず、中国の人々が求める医薬品をより幅広く提供できるように、卸販売の認可も申請しています。

参天製薬はいま、新薬の提供のみならず、中国の患者さんに必要とされる薬を、あらゆる選択肢を駆使してお届けすることが最優先だと考えています。

## 世界の患者さんのための品質管理と参天DNAを受け継ぐ人づくり

中国の患者さんに貢献するための取り組みと同時に、日本・欧州向け製品のバックアップ機能を構築するための準備も始まっています。既に高い基準の中国・新GMPを取得した蘇州工場ですが、今後グローバルな製品供給・信頼性保証体制を確立していくためには、施設・設備の増強のみならず、優れたハードを活かしかける人材の育成が重要なテーマです。

その第一歩として、日本から蘇州工場へ新工場長をはじめとする出向者を派



滋賀グローバル・コアサイトの立ち上げに尽力後、蘇州工場長に就任した樋本 勉

遣。中国の基幹スタッフに直接指導を行いながら、マニュアルでは伝授できない参天製薬のモノづくりに対するDNAを伝えていきます。蘇州工場は、現地スタッフから「人を大切にする会社」としての評価を得ていますが、「人を育てるための厳しさ」も必要です。世界の患者さんと患者さんを愛する人たちのために、高品質な医薬品を安定供給する役割を担う参天製薬の生産拠点では、そこで働く人々も参天品質を体現する理念を共有していなければならないと考えるからです。

現地スタッフと協力し、先端GMPである欧州基準をクリアすれば、蘇州工場は世界中どこでも通用するグローバル製品供給拠点として、世界の患者さんのために大きな役割を果たしていきます。



優秀な現地スタッフとともに、参天品質を実現する

執行役員  
プロダクトサプライ本部長  
太田 淳稔



## 天機に参与する—— 「真の顧客ニーズ」に応えるための グローバル製品供給体制の再構築

2013年7月、生産物流本部はプロダクトサプライ本部へと改称しました。それは当社が「作れる製品を供給すること」ではなく、「世界の顧客が求める製品を供給すること」を大きな目標にしていることについて意思表示するためでした。

参天製薬がめざしている「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」になるためには、世界のどこでも参天ブランドの眼科薬が使われているようにならなくてはなりません。しかし当社が「作れる製品」にこだわっているのは、それは実現できない。自社・他社生産を問わず、顧客の求める「製品を供給すること」が最優先されるはずで、では、顧客の求める製品は何かと言えば、期待以上の品質、仕様でありながら求めやすい価格の製品でしょう。それが「真の顧客ニーズ」に基づいてたどりついた明快な答えです。

当社のグローバル製品供給体制の再構築とは、世界4拠点それぞれの特長を最大限に活かすことで、「真の顧客ニーズ」に応えるための取り組みです。品質とコスト競争力の両立。それが、基本理念である「天機に参与する」を実現させるため、私たちに与えられた使命だと思います。

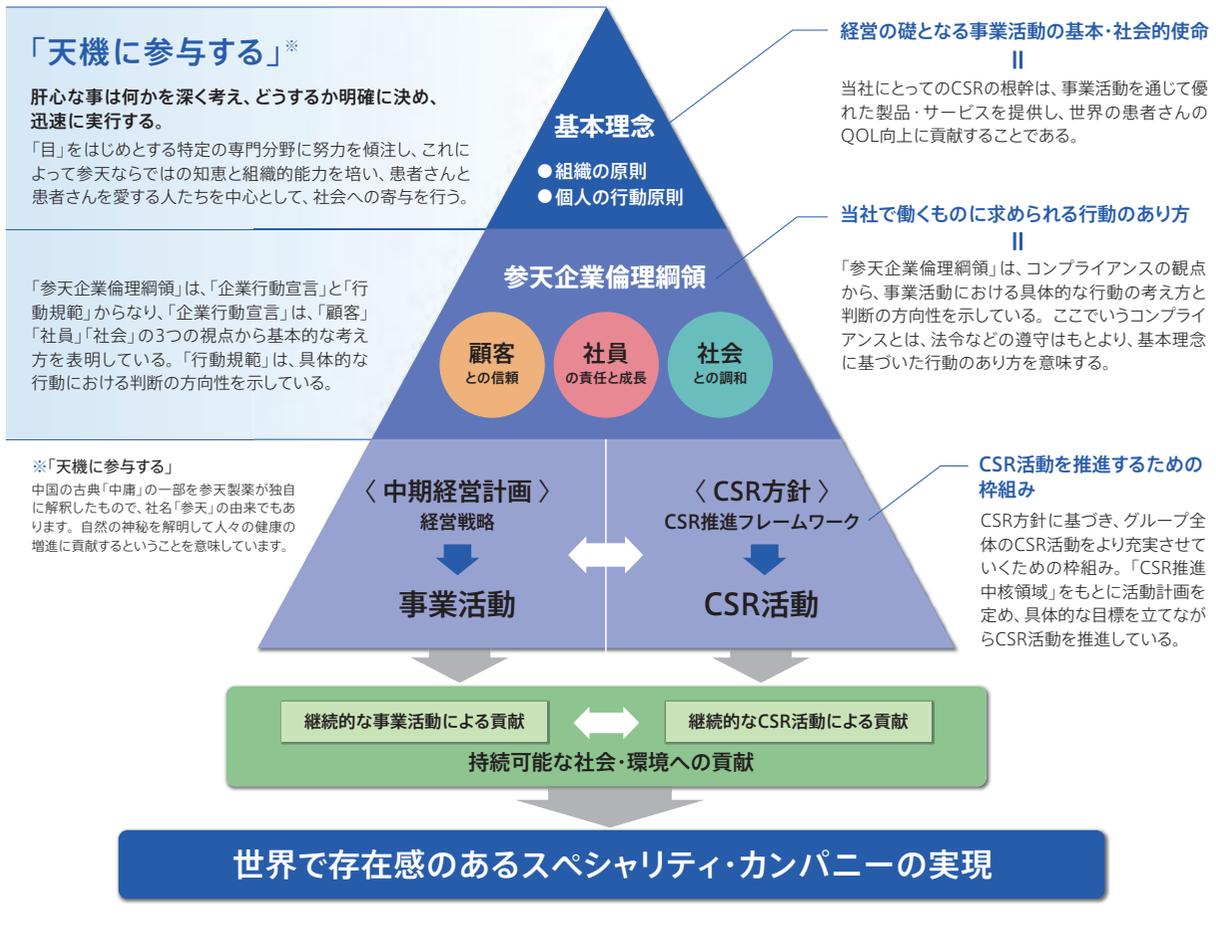
# 参天製薬グループのCSR

参天製薬グループのCSRは、「基本理念」に基づいた「経営と一体のCSR」です。その推進のために「CSR方針」を定め、さらに「参天企業倫理綱領」の「顧客」「社員」「社会」の3つの視点と「ISO26000」の中核主題を参考に当社独自に定義した7つの「CSR推進中核領域」を設定。各領域ごとに目標を立てCSR活動の充実を図っています。

## 経営と一体のCSR

1890年の創業以来、当社は基本理念「天機に参与する」に謳われている、いかなる時代にあっても「創造と革新」を追求し、常に患者さんと患者さんを愛する人々たちを中心として社会に貢献することを当社の使命としてきました。2020年に向けた経営ビジョン

「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」の実現をめざす現在も、当社は、事業活動とCSR活動を一体的かつ継続的に推進することにより、持続可能な社会ならびに環境への貢献を果たし、その結果として経営ビジョンが実現すると考えています。



「参天企業倫理綱領」にISO26000の考え方を取り入れて設定した参天製薬グループにおける「CSR推進中核領域」



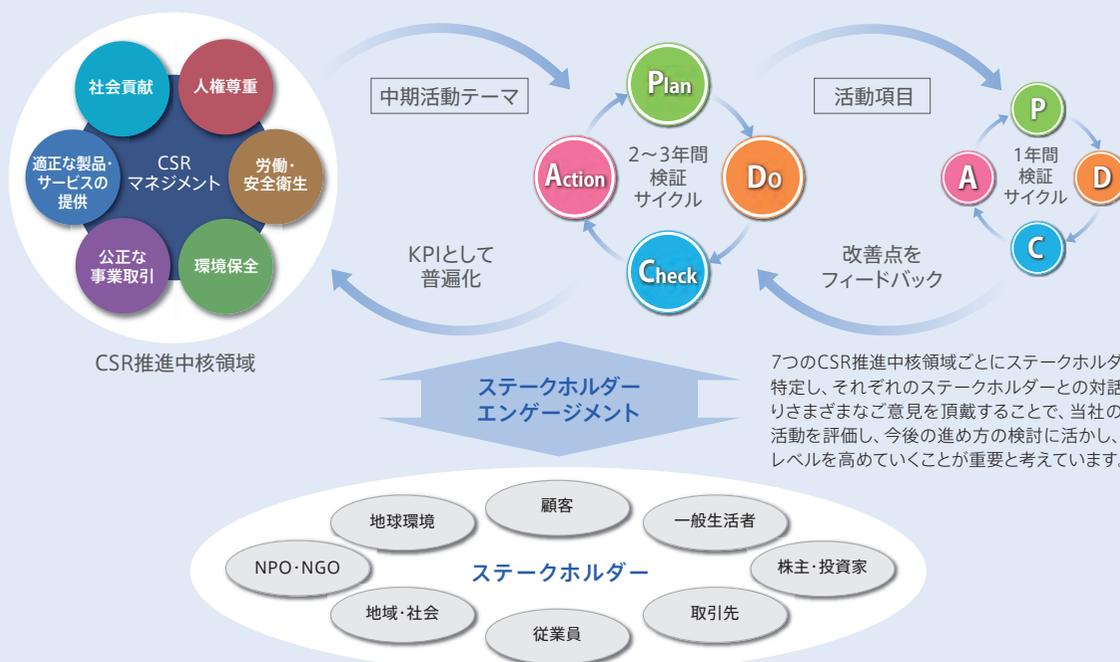
# CSR方針

参天製薬グループは「天機に参与する」という基本理念に基づいた事業活動を通じて、優れた製品・サービスを提供することにより、世界の患者さんのQOL向上に貢献し続けます。

CSRガバナンス	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 参天製薬グループは、ISO26000の社会的責任の原則を尊重しCSR活動を推進します。*1</li> <li>● 参天製薬グループは、CSR推進フレームワークに沿ってCSRマネジメントによるCSR活動を推進します。*2</li> </ul> <p><small>※1 説明責任、透明性、倫理的な行動、ステークホルダーの利害の尊重、法の支配の尊重、国際行動規範の尊重、人権の尊重 ※2 ISO26000を参考に当社独自で定義したものの</small></p>
適正な製品・サービスの提供	● 参天製薬グループは、適用される法規、規格、基準を満足し、最新の科学技術を応用して、消費者に信頼されるより高い品質を確保した医薬品・医療機器とサービスを提供します。
公正な事業取引	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 参天製薬グループは、事業活動を行う国や地域における法規・事業慣行等を遵守します。</li> <li>● 参天製薬グループは、取引先を私たちのパートナーと考え、相互の発展をめざすとともに、法規・事業慣行等の遵守を求めます。</li> </ul>
人権尊重	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 参天製薬グループは、事業を行うすべての国と地域において、人権を尊重した活動を推進します。</li> <li>● 参天製薬グループは、従業員一人ひとりが高い倫理観を持ち、お互いに敬意を払い、連帯感のある職場づくりを推進します。</li> </ul>
労働・安全衛生	● 参天製薬グループは、「人命」を第一に考え、従業員の安全確保および健康増進を図り、働きやすい職場環境の維持・向上を推進します。
環境保全	● 参天製薬グループは、生物多様性が生み出す自然を地球環境の重要な基盤であると認識し、地球環境を保護・保存し、「美しい地球を次世代に引き継ぐ」ための活動を推進します。
社会貢献	● 参天製薬グループは、事業分野における医療の発展、福祉の充実に向けた活動、および良き企業市民としての活動を推進します。

## CSR活動の実践

CSR活動の実践においては、「CSR推進中核領域」の7つの領域ごとに「中期活動テーマ」と、より具体的な「活動項目」を設定し、中期・短期でPlan（計画）→Do（実践）→Check（評価）→Action（改善）のPDCAサイクルを実行します。より実態に即したマネジメント課題を精査しながら早期に主要評価指標（KPI）を定め、普遍的な観点からCSRマネジメントの深化を図っていきます。



# I CSRマネジメント

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動 <small>※詳細はコーポレートウェブサイトに掲載しています。</small>
CSRマネジメントシステムの構築と円滑な運用	コンプライアンスに関するPDCAサイクルを構築する	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 参天製薬グループにおける「CSR推進概念」を定義した</li> <li>● 5つの全社CSR関連委員会を年2回開催した</li> <li>● マネジメントリスク評価に「CSR推進フレームワーク」を適用した</li> </ul>
	安全衛生に関するPDCAサイクルを構築する	
	防火防災に関するPDCAサイクルを構築する	
	環境保全に関するPDCAサイクルを構築する	
ステークホルダーエンゲージメントの確立	多様な媒体による情報開示を確立する	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 複数のインターネット媒体を通じてCSRレポートの配信を開始した</li> <li>● 視覚に障がいのある方にもお読みいただける規格での提供を開始した</li> <li>● コーポレートウェブサイトにCSRページを新設した</li> </ul>
	ステークホルダーとのダイアログを実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 株主・投資家への情報開示とコミュニケーションを実施した</li> <li>● 患者さんや医療関係者と社員との接点創出を推進した</li> <li>● インターネット媒体を活用した社外アンケートを実施した</li> <li>● 全社CSR推進における中核メンバーとの対話会を開催した</li> </ul>

## Do 2012年度活動ハイライト

### CSRマネジメントシステムの構築と円滑な運用

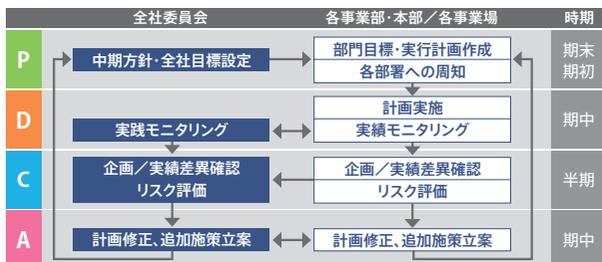
#### PDCAサイクルを構築する

#### CSR推進体制の見直し

当社ではCSR委員会を2007年より設置し運営してきましたが、発足から一定の時間が経過したこと、ならびに2010年のISO26000の発行を受け、より効果的な運営をめざして2011年に再編しました。CSR委員会を構成する5つの委員会では、中期方針や全社目標を設定。その上で、各事業部・本部や事業場における活動をモニタリングすることで、計画と実績の差異を確認し、リスク評価、計画修正、追加施策の立案を経て、翌期のプランニングに戻るPDCAサイクル<sup>※1</sup>の運営を推進します。

※1: PDCAサイクル = 事業活動を円滑に進める手法の一つ。P(Plan)・D(Do)・C(Check)・A(Action)という事業活動の「計画」「実践」「評価」「改善」のサイクルを表す

#### ●各委員会のPDCAサイクル



### ステークホルダーエンゲージメントの確立

#### 多様な媒体による情報開示を確立する

#### 多様な媒体による情報開示の推進

当社のCSR活動を、ステークホルダーの皆さまにわかりやすくお伝えるための年次報告書を発行しています。2011年度までは「社会・環境報告書」として、2012年度からは「CSRレポート」に改称して発行しました。「CSRレポート」は、冊子としてステークホルダーの皆さまに配布するだけでなく、コーポレートウェブサイトから電子ファイルでも閲覧いただけます。加えて、2012年度より、CSR報告書を集めた情報サイトである「CSR図書館.net」や「環境goo」への登録も行いました。

また、視覚に障がいのある方にも内容をお伝えるため、2012年度版より、音声による確認が可能なデージー<sup>※2</sup>版の作成・配布を開始しました。

※2: デイジー = 視覚障がい者、肢体障がい者、学習障がい者や、健常者でも何らかの「読み」に不自由のある人のために開発された音声付録音図書規格



コーポレートウェブサイトCSRページ

Check 自己評価

Action 次年度の活動方針

PDCAサイクル構築に向けた体系整備は概ね終了し、CSRを推進するための5つの全社委員会の運営も軌道にのった。「CSR推進フレームワーク」によるリスク評価を開始し、推進中核領域に基づいた網羅的なリスクの洗い出しに着手した。



●委員会運営を通じた施策実行の着実なモニタリング、各推進中核領域に対するリスク評価の展開、施策立案における中期的な課題への対応強化など、PDCAサイクルの各段階を強化し、CSR推進のさらなる充実を図る。

より多くの方に参天製薬グループのCSRに対する考え方・活動を知っていただくことを目的に、CSRレポートの配信・提供媒体の多様化と、コーポレートウェブサイトにおける活動情報などの発信を開始した。



●新設されたCSRページや多様な媒体を通じた情報発信を継続し、より多くの方に参天製薬の取り組みなどを理解いただく。  
●有用な情報をお届けするため、ステークホルダーの方々からいただいたご意見を参考に、開示する情報や発信方法の充実を図る。

「真の顧客志向」を追求するため、患者さんや視覚に障がいのある方との対話の機会づくりを開始した。  
事業活動に反映するため、対話会やアンケートの実施などステークホルダーの方々のご意見をいただく活動を充実させた。



●患者さん・医療関係者・視覚に障がいのある方と社員との接点づくりをさらに拡充する。  
●ダイアログなどの機会を充実させて、多様なステークホルダーの方々のご意見を収集し、CSR推進活動に活かす。

ステークホルダーとのダイアログを実施する

視覚に障がいのある方々の工場見学会を実施

2012年11月、社会福祉法人滋賀県視覚障害者福祉協会、滋賀県立視覚障害者センターから37名の皆さまに滋賀工場にご来場いただき、工場見学および当社社員との意見交換会を実施しました。当社からは工場長をはじめ、製造ラインや品質管理の責任者など計12人が参加しました。



意見交換会の様子

工場見学では、見学通路に沿って目薬の製造工程をご見学いただいたほか、視覚に障がいのある方にもご理解いただきやすいよう、実際に点眼薬の完成品や容器の部品を手にと



工場見学に来られた皆さまと

っていただき、目薬を使用される状況を想定しながらの開封体験なども行っていただきました。

意見交換会では、視覚に障がいのある方々の視点から、目薬の識別性の向上に関するご要望や新薬開発に対するご期待、目薬の使い方に関するご質問や社会貢献に関するご要望など、貴重なご意見を数多く頂戴しました。

いただいたご意見を参考にしながら、当社では製品の開発や改良、サービスの向上や改善、CSR活動の充実に取り組んでまいります。

眼科医の先生方と研究員との意見交換会を実施

患者さんや一般生活者の方の困っておられることをより深く理解し、研究開発活動に活かしていくことを目的に、医療関係者や患者さんと研究員との対話の機会づくりに努めています。「高山サイエンスタウンフェスティバル」において、当社は眼科医の先生をお招きし「目の相談コーナー」を開設しています。イベント終了後に眼科医の先生方と当社研究員が意見交換する機会を設けました。



眼科医の先生方と研究員との意見交換会

# I CSRマネジメント / II 適正な製品・サービスの

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動 <small>※詳細はコーポレートウェブサイトに掲載しています。</small>
ステークホルダー エンゲージメントの確立	社内外からのホットラインを確立する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●お客さまからのお問い合わせ・ご相談・ご意見に対しお応えした</li> <li>●コンプライアンス相談・通報窓口の運営と啓発を実施した</li> </ul>
	各領域における デューデリジエンスを確立する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●社内規程に則った購買・契約締結を実施した</li> <li>●取引先に対するデューデリジエンスの検討を開始した</li> </ul>
	社員への「CSR推進概念」の浸透を図る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●経営幹部を含む社員向け研修を実施した</li> <li>●全社員にCSRレポートを配布し、アンケートを実施した</li> </ul>
優れた製品の開発と提供	高品質な製品を製造し安定的に供給する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●生産の本部機能と大阪工場機能を滋賀に集約した</li> <li>●蘇州工場でGMPを取得し、一貫製造を開始した</li> </ul>
	医療ニーズに基づいた製品を研究・開発する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●2品目の新製品発売、1品目の製造承認取得、2品目の製造承認申請をした</li> <li>●3品目の点眼容器を改良した</li> </ul>

## Do 2012年度活動ハイライト

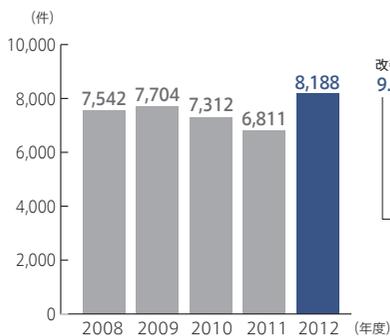
### ステークホルダーエンゲージメントの確立

#### 社内外からのホットラインを確立する

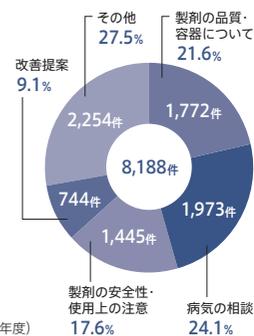
#### お客さまからのご相談への対応

「お客様相談室」を1996年から設置し、毎年7,500件前後のご相談をお電話やお手紙、コーポレートウェブサイトなどで受け付けています。より手軽にお問い合わせいただけるよう、2012年度からは専用電話のフリーコール化を実施しました。誠実な対応を第一とし、薬の特徴や副作用の説明はもちろん、安全性・品質上のご質問には各担当部門とも連携してお答えし、医薬品の適正使用につながるよう努めています。

●お客様相談室へのご相談件数



●ご相談内容の内訳 (2012年度)



### コンプライアンス相談・通報窓口の運営

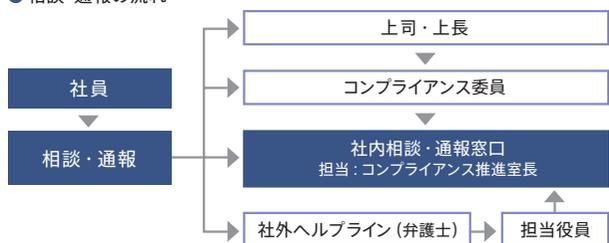
社員がコンプライアンス上疑義のある行為や質問について、相談・通報しやすいように、社内に「コンプライアンス相談・通報窓口」「セクハラ・パワハラ相談窓口」を設け、電話、電子メールで相談・通報を受ける体制を整備しています。

社内窓口に加えて、会社とは独立した立場の弁護士などによる「社外ヘルプライン」も設置しています。

これらの相談・通報窓口が有効に機能し得るよう、窓口の電話番号やメールアドレスを掲載した「コンプライアンスカード」を全社員に配布、周知に努めています。

これら窓口で相談・通報のあった内容については、「公益通報者保護法」に基づく社内規程を定め、相談・通報者のプライバシーを全面的に保護するとともに、相談・通報者が不利益を被らないよう万全の配慮をしています。

●相談・通報の流れ



## Check 自己評価



## Action 次年度の活動方針

<p>お客さまから寄せられたご意見を製品の改善などに活かした。</p> <p>健全な事業運営を確保するため、相談・通報窓口の啓発を実施した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 継続して、お客さまからのお問い合わせ・ご相談対応の向上を推進する。</li> <li>● 社員に対する相談窓口の啓発を継続して実施する。</li> </ul>
<p>事業活動全般を通じた社会的責任をより確実に果たしうよう、取引先に対するデューディリジェンスの検討に着手した。</p>	△	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 委託製造先、原料調達などの取引先に対して、CSR取り組み状況などのデューディリジェンスを開始する。</li> </ul>
<p>「CSR推進概念」の定義が完了し、社内への浸透に着手した。</p> <p>全社員へのアンケートを行い理解状況の確認などを行った。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 社内研修内容を見直し、カリキュラムに組み込むなどの方法を立案し、社員への理解・浸透を図る。</li> <li>● 参天製薬グループ全体への浸透を推進するため、海外グループ会社に順次展開する。</li> </ul>
<p>工場ごとの特長を活かした生産体制整備と、必要な認証取得を行い、経営ビジョンに沿ったグローバル製品供給体制の再構築を開始した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 製品供給先となる地域で求められる基準への適合を図り、グローバル製品供給体制のさらなる強化を推進する。</li> </ul>
<p>未充足ニーズの高い加齢性黄斑変性治療薬を含む新製品2品目を発売するとともに、お客さまから寄せられた声を製品サービスの改善につなげた。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 開発計画に基づき、着実に医療用医薬品の研究・開発を推進する。</li> <li>● 一般用医薬品において2品目を新発売する。</li> </ul>

### 社員への「CSR推進概念」の浸透を図る

#### CSR研修の実施

社員一人ひとりがCSRの考え方を理解し、高い倫理観を持って行動することが、社会的責任を果たすための大切な要素と考え、「CSR推進概念」の浸透化に取り組んでいます。

経営幹部を対象とした研修では、ISO26000国際起草委員の一人である日本ILO協議会 熊谷謙一先生を講師にお招きして、国際起草委員として携われたご経験をトピックスとして交えながら、ISO26000が発行されることになった背景や、企業が活用するためのヒントなどを、わかりやすく解説いただきました。新入社員を対象とした研修では、「CSR推進概念」の解説に加え、倫理・法令遵守、人権尊重、安全衛生など、参天社員として理解しておくべき内容について「CSR推進概念」と関連づけて説明し、理解・浸透を図りました。



経営幹部研修の様子

### 優れた製品の開発と提供

#### 医療ニーズに基づいた製品を研究・開発する

#### お客さまからの貴重な声を活かし、製品・サービスの改善につなげる

MR<sup>※</sup>や「お客様相談室」がお客さまからいただいた貴重なご意見は、社内の関係者に共有し、ご意見の内容を十分に検討した上で、その結果を適正使用の推進につなげるため、MRなどの関係者に周知し医薬情報提供活動に反映するとともに、製品などの改良にも活かしています。

#### 改善事例

「サイプレジン1%点眼液」「ベノキシル点眼液0.4%」「ミドリンP点眼液」の容器本体、中栓、キャップを次のように改良しました。

- 中栓の形状を変更し、検査時にも点眼しやすくしました。
- キャップの開栓回転数を少なくし、開閉しやすくしました。
- キャップの形状を円筒形にし、持ちやすくしました。

#### ● 検査用点眼剤の容器変更



※MR=Medical Representativeの略。医薬情報担当者

## II 適正な製品・サービスの提供

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動 <small>※詳細はコーポレートウェブサイトに掲載しています。</small>
優れた製品の開発と提供	倫理に基づいた研究・開発を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●研究倫理委員会による試料提供者保護の維持・向上に取り組んだ</li> <li>●治験倫理委員会による臨床試験被験者保護の維持・向上に取り組んだ</li> <li>●動物実験委員会による動物福祉の維持・向上に取り組んだ</li> <li>●動物実験における倫理審査の外部認定を取得した</li> </ul>
	製品のライフサイクル全般において信頼性を確保する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●グローバル信頼性保証マネジメントシステムを確立した</li> <li>●各国の医薬品研究開発、製造、流通、販売に関する各種基準に適合する信頼性の維持・向上に取り組んだ</li> </ul>
製品・疾患に関する情報・サービスの提供	患者さんや一般生活者に有用な情報・サービスを提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●患者さんを対象とした疾患・医薬品適正利用のための情報を提供した</li> <li>●一般生活者を対象とした疾患予防などの情報を発信した</li> </ul>
	医療関係者に有用な情報を提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●MR活動による情報提供に取り組んだ</li> <li>●講演会などを通じた情報提供に取り組んだ</li> <li>●Webを通じた情報提供に取り組んだ</li> </ul>
	法令、自主基準などを遵守する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●情報提供活動などに関する業界自主基準、自社ルールの教育を実施した</li> <li>●医療関係者などとの関係性に関わる情報を公開した</li> <li>●患者団体との関係性に関わる指針を策定し、公開した</li> </ul>

### Do 2012年度活動ハイライト

#### 優れた製品の開発と提供

倫理に基づいた研究・開発を実施する

#### 動物実験における倫理的配慮

医薬品の研究開発には、薬の安全性や有効性を確認するため、動物実験が必要となります。動物の生命を尊び、不必要な苦痛を与えないという考えのもと、当社ではすべての実験について、その必要性を「動物実験委員会」で審査し、研究所の責任者が承認した実験のみ実施可能となるよう制度化しています。また、実施状況の点検・評価を行うとともに、研究者一人ひとりが動物実験における倫理の原則を理解し、動物を用いた実験は必要最小限にとどめ、動物福祉の観点に最大限配慮して実施しています。

客観性を担保するため、公益財団法人ヒューマンサイエンス振興財団動物実験実施施設認証センターによる実地調査を受け、2013年2月に適合施設として認定を受けました。



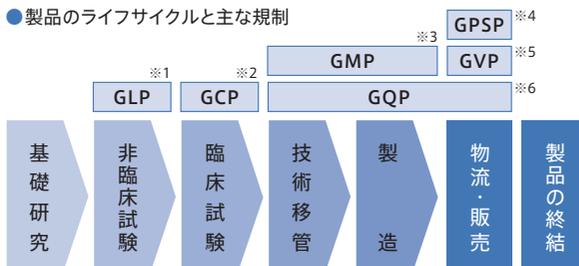
第三者検証による認定証

製品のライフサイクル全般において信頼性を確保する

#### グローバルな信頼性保証体制の確立

「グローバル品質マネジメント委員会」「グローバル安全性監視委員会」を設置し、有効性と安全性に優れた高品質な製品とサービスの、効率的・安定的な提供に努めています。両委員会での重要案件は信頼性保証本部から代表取締役へ報告、課題を俯瞰的に把握して迅速な対応が図れるようにしています。

#### ●製品のライフサイクルと主な規制



- ※1 GLP (Good Laboratory Practice) 医薬品の安全性に関する非臨床試験の実施の基準
- ※2 GCP (Good Clinical Practice) 医薬品の臨床試験の実施の基準
- ※3 GMP (Good Manufacturing Practice) 医薬品及び医薬部外品の製造管理及び品質管理に関する基準
- ※4 GPSP (Good Post-marketing Study Practice) 医薬品の製造販売後の調査及び試験の実施の基準
- ※5 GVP (Good Vigilance Practice) 医薬品、医薬部外品、化粧品及び医療機器の製造販売後安全管理の基準
- ※6 GQP (Good Quality Practice) 医薬品、医薬部外品、化粧品及び医療機器の品質管理の基準

Check 自己評価

Action 次年度の活動方針

<p>倫理に基づいた研究・開発を担保するため、制度を確実に運用した。</p> <p>動物実験倫理に関し、これまでの実績をもとに外部機関の認定を取得した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 継続的にプロセスの確認・見直しを行い、実効性と効率化の維持・向上を図る。</li> <li>● 研究内容の高度化に伴う必要な仕組みを整備する。</li> </ul>
<p>品質基本方針に従った製品の品質と安全性に関するグローバルでの信頼性保証マネジメントシステムを構築し、マネジメントレビューを実施した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● マネジメントレビューにより抽出された項目についてグローバル目標を設定し改善に取り組む。</li> <li>● 「国際的な医薬品査察協定及び医薬品査察共同スキーム」のGMPガイドラインへの対応を実施する。</li> </ul>
<p>コーポレートウェブサイトのリニューアルに合わせて、提供情報の見直し・充実を行った。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 引き続き、医薬品の適正使用などの推進に向け、情報・サービス提供の充実を図る。</li> </ul>
<p>MR活動を中心に、講演会、コーポレートウェブサイトなどにより、医療関係者への迅速で有用な情報提供活動が実施できた。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● MRの資質向上やコーポレートウェブサイトにおける医療関係者向け情報の内容充実などにより、情報提供活動のさらなる向上を図る。</li> </ul>
<p>医療発展への貢献活動を適正な関係のもとで行っていることを示すため、業界自主基準ならびに当社指針に基づき、医療関係者などへの資金提供などの公開を開始した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 継続的に社内教育を実施し、適正な活動を維持する。</li> <li>● 医療関係者や患者団体などとの関係の公開を進める。</li> </ul>

製品・疾患に関する情報・サービスの提供

患者さんや一般生活者に有用な情報・サービスを提供する

コーポレートウェブサイトでの情報提供

当社のコーポレートウェブサイトでは一般生活者の方向けに「目の情報」「リウマチの情報」のページを設け、製品情報だけでなく、さまざまな情報を提供しています。

「目の情報」では、よくある病気の解説から目のヘルスケアまで、目に関するあらゆることをお伝えしています。「リウマチの情報」では、リウマチ患者さんやご家族の方々が療養上の悩みや不安を軽減し、より快適に暮らしをエンジョイできるような情報を提供しています。

眼科関連では、さらに「ひとみすこやか.com」「HELP!ドライアイネットワーク」でも、目の健康や疾患関連情報を提供しています。

リニューアルしたウェブページ



一般生活者の皆さまへの情報発信

学研都市・高山地区で毎年開催される「高山サイエンスタウンフェスティバル」に参加しています。

当社の奈良研究開発センターの一部を一般公開し、当社研究員が医薬品の研究・開発や製造工程、疾患に関する基礎的な知識について、一般生活者の皆さまに直接説明させていた



「目の相談コーナー」（相談光景）

だく機会を設けています。また、奈良県立医科大学から眼科医の先生をお招きし、「目の相談コーナー」を開設。見学に来られた方の疑問にお答えし、必要に応じて眼科の受診をお薦めしました。



見学者の方の質問に研究員が答える

# III 公正な事業取引 / IV 人権尊重

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動 <small>※詳細はコーポレートウェブサイトに掲載しています。</small>
コンプライアンス意識の醸成	啓発活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●省令などに基づく薬害研修などを実施した</li> <li>●公務員倫理規程や下請法などの事業取引に係る教育を実施した</li> <li>●情報セキュリティ保護などの基本的な教育を実施した</li> </ul>
事業活動におけるコンプライアンス確保	事業活動のモニタリングを実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●内部統制システムの運用と改善に取り組んだ</li> <li>●「CSR推進概念」を反映した事業活動に係るリスク評価を実施した</li> </ul>
	バリューチェーンにおけるデューディリジェンスを推進する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パートナー企業による事業取引に関する調査に対応した</li> </ul>
人権尊重意識の醸成	啓発活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●雇入時および管理職登用時の研修を実施した</li> <li>●各職場単位での自主的な研修を実施した</li> <li>●社内ポータルを通じた啓発情報を発信した</li> </ul>
事業活動における人権尊重	事業活動のモニタリングを実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「CSR推進概念」に基づいた人権尊重に係るリスク評価を実施した</li> </ul>
	人権におけるデューディリジェンスを推進する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パートナー企業による人権尊重に関する調査に対応した</li> </ul>

## Do 2012年度活動ハイライト

### 事業活動におけるコンプライアンス確保

事業活動のモニタリングを実施する

#### 内部統制システムの運用と改善

経営資源の保護と財務報告の健全性確保のため、内部統制システムを構築しています。本社、工場などの拠点ごとに、ビジネスサイクルのリスクを評価。高リスクは詳細な点検を行い、低リスクは点検を簡易なものとするなど、リスクの程度に基づき評価方法を定め、内部監査室および外部監査人による監査を実施しています。また、リスク評価の対象や点検手法は、定期的に見直しを行い、より実態に即したものとしています。

#### ●リスクアプローチによる評価範囲の決定

ビジネスサイクル名	参天製薬		子会社		リスク	文書化の種類(例)
	本社	A工場	C社	.....		
① 販売管理	●		●	●	高	フローチャート 詳細版 チェックシート
② 購買管理	●	●	●	●		
③ 固定資産管理	●	●		●	中	詳細版 チェックシート
④ 財務管理	●		●	●		
					低	簡易版 チェックシート

(本表はイメージです)

### 「CSR推進概念」に基づくリスク評価の実施

「CSR推進概念」に基づくリスク評価として、以下を目的に管理職自身が組織運営等のセルフチェックを行う「マネジメント自己評価」を実施しました(回答率100%)。

#### 「マネジメント自己評価」の目的

- 管理職一人ひとりがPDCAサイクルを回すことにより、組織運営や事業遂行の継続的な改善につなげる
- 各部門、全社としても、全体状況を把握・分析し、施策を立案・実行することで改善推進に活用する

設問は、「組織運営」、「適正な製品・サービスの提供」、「公正な事業取引」、「人権尊重」、「健康と安全の確保」の5つのカテゴリーで設定しました。そして、PDCAマネジメントの実践度、行動レベルを確認して改善につなげるため、以下に例示しているような4段階の回答選択肢としました。

#### 「マネジメント自己評価」の回答選択肢

- 1: プロセスが定着しているか?
- 2: プロセス(仕組み・手順)が定められているか?
- 3: 管理職が組織長として行動を起こしているか?
- 4: 該当項目について、基本が理解されているか?

Check 自己評価

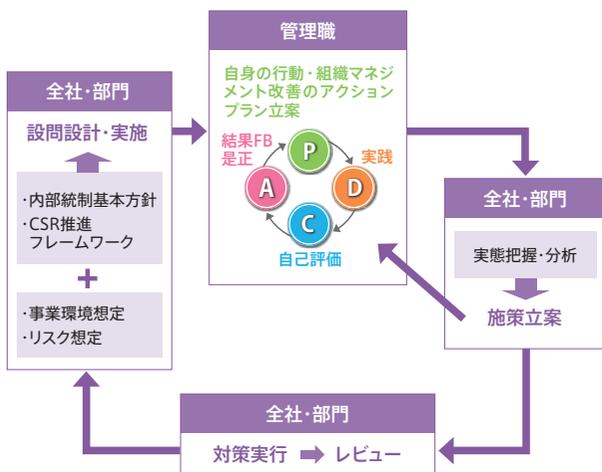
Action 次年度の活動方針

法令などを確実に遵守し得るよう、一般法令に加え、業界自主基準や薬害教育などの継続的な教育を実施するとともに、法令変更などのモニタリング体制を強化した。	○	● 啓発活動の実効性を上げるため、環境変化、リスク評価の結果などを踏まえ、教育メニューの継続的見直しを行う。
評価結果に基づき、全社および各部門の2013年度のアクションプランを立案、全社委員会で共有した。	○	● 立案された計画を着実に実施することで、モニタリング結果を改善につなげる。 ● 内部統制システム、リスク評価の継続的改善と運用を行う。
事業活動における法令遵守などの社会的責任を果たすため、パートナー企業の調査に協力するとともに、ベンチマークを行い当社の実施体制整備に着手した。	△	● 取引先に対する法令遵守などコンプライアンス確保のための、デューディリジェンスの仕組みの整備・運用を開始する。
多様な人権問題について、社員が常に高い意識を持ち、人権を尊重した行動をとり得るよう、リスク評価の結果を踏まえ、職場内対話の促進など、継続的な啓発活動を実施している。	○	● 啓発活動の実効性を高めるため、さらにカリキュラムの見直し・強化を図る。
評価結果に基づき、全社および各部門の2013年度のアクションプランを立案、全社委員会で共有した。	○	● 立案された計画を着実に実施することで、モニタリング結果を改善につなげる。
事業活動における人権尊重を果たすため、パートナー企業の調査に協力・受け入れるとともに、ベンチマークを行い当社の実施体制整備に着手した。	△	● 取引先に対する、人権尊重確保のための、デューディリジェンスの仕組みの整備・運用を開始する。

併せて、問題などの発生・認識状況を確認する設問、フリーコメントにより実態の把握に努めています。

これまでの継続的な取り組みにより、改善成果は着実に表れてきています。前年度との比較などにより、全社共通の課題や事業部・本部ごとの課題を洗い出し、2013年度のアクションプランを策定しましたが、本社部門、各事業部・本部ならびに管理職の一人ひとりが着実にPDCAサイクルを回し、継続的な改善につなげていきます。

● 全社・部門・組織の各レベルにおけるPDCAマネジメントの徹底



## 人権尊重意識の醸成

### 啓発活動を実施する

### 啓発推進におけるPDCAマネジメントの実践

社員一人ひとりへの人権尊重意識・行動の浸透に向けて、入社時研修や管理職登用時研修への人権教育の組み入れや、年間を通じた全社員への啓発活動を実施しています。

当社ではCSR活動にPDCAマネジメントの考え方を取り入れていますが、人権尊重の取り組みにおいても例外ではありません。具体的には、啓発の主題をこれまでの「知識の提供」から「行動を促す職場での対話の創出」へと移行し（Plan）、ニュースレターなどを活用した職場内対話の実施（Do）、対話の実施状況・結果の確認（Check）、そして、部門ごとの実施状況や好事例を共有し、さらなる促進につなげる取り組み（Actionから次のPlanへ）を行っています。



部門内管理職人権研修

# V 労働・安全衛生

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動 <small>※詳細はコーポレートウェブサイトに掲載しています。</small>
公正な労働の確保	労働に関する法令等を遵守する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「高年齢者雇用安定法」に対応する再雇用制度を整備した</li> <li>●「障害者雇用促進法」に基づき、障がい者雇用を推進した</li> <li>●賃金、福利厚生、勤務体系などについて定期的な労使間協議を実施した</li> </ul>
	社内制度の整備と活用を推進する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ワークライフバランスを図るための各種休暇・休業制度の活用を促進した</li> </ul>
安全衛生の確保	社員の安全を確保する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●新設オフィスにおける安全衛生マネジメントシステムを構築した</li> <li>●執務環境の維持・向上を図り、労災防止対策を実施した</li> <li>●防火防災訓練を実施し、防災上必要な資機材を拡充した</li> <li>●交通違反・事故の防止と削減を推進した</li> </ul>
	社員の健康増進を図る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●メンタルヘルスに関する研修やストレス調査を実施し、海外勤務者の社外相談窓口を導入した</li> <li>●雇入れ時健康診断と定期健康診断を実施した</li> <li>●健康増進のための啓発活動を実施した</li> </ul>

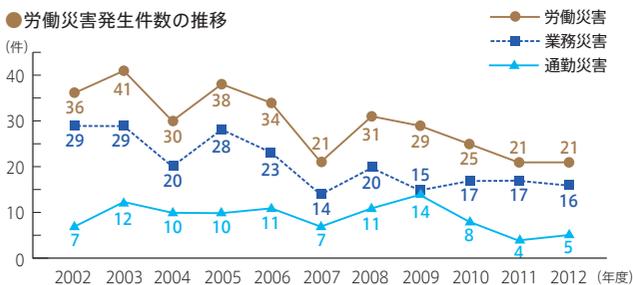
## Do 2012年度活動ハイライト

### 安全衛生の確保

#### 社員の安全を確保する

#### 労働災害防止の取り組み

社員の労働安全衛生の向上を図るために、事業場ごとに「安全衛生委員会」を組織化し、特性・規模に応じた労働安全衛生マネジメントシステムを構築しています。各事業場において、労働安全衛生マネジメントシステムに基づいて年間計画を立て、リスクアセスメントによるリスク低減や、労働災害が発生した際の、発生原因の究明、再発防止対策などに取り組んだ結果、業務災害・通勤災害を合計した労働災害発生件数は2003年度の41件をピークに継続的に減少傾向を示しており、2012年度の発生件数は業務災害16件、通勤災害5件、合計21件と10年前の約半数となっています。



### 防火防災の取り組み

#### 1. 全社防火防災体制の構築

2011年3月の東日本大震災の発災を機に、人命の安全確保と事業の継続をより確実なものとするため、各事業場(本社・奈良研究開発センター・能登工場・滋賀工場)において防火と防災の双方に対応可能な計画の再整備に着手し、2012年度に一次整備を完了しました。全国の営業オフィスにおいても、防火防災体制の整備を行い、テナントビルでの共同避難訓練への参加など、社員の安全確保に努めています。

#### 2. 防火防災用資機材・備蓄品の見直しと配備

大規模地震などの災害発生に備えた防火防災用資機材・備蓄品の配備について、全社的な配備方針を定め、全事業場・営業オフィスへの配備を完了しました。

#### 3. 消防訓練・防災訓練の実施

各事業場では、年度中に1~2回の消防・防災訓練を実施しています。



国内事業場での消防訓練(地区隊本部)



国内事業場での消防訓練(救護班)

Check 自己評価

Action 次年度の活動方針

法改正に対応し、定年退職者再雇用制度の整備を完了し、障がい者雇用の拡大により法定雇用率を満たした。

賃金・賞与、就業カレンダー、各種手当、労働協約、定年退職者再雇用制度などについて、定期的な労使間協議に加え必要に応じて臨時に開催し、労使双方の合意形成ができた。



● 継続した法令遵守の徹底と、法改正に応じて対応する制度や規程類の整備を図る。

● 導入された定年退職者再雇用制度の運用定着化を図る。

● ワークライフバランスのさらなる向上のために、各種制度の整備を進める。

新設オフィスの安全衛生委員会組織を整備・完了した。

労働災害削減のために事業場ごとにリスク低減化および発生労災の再発防止策を実施した。

事業場ごとに地震などの災害発生時および火災発生時の避難訓練の実施と、災害発生時に必要となる備蓄品・資機材の拡充を実施した。

営業車両の交通違反・事故について、事業部ごとにリスクに応じた削減策を立案・実行した。



● 安全衛生において、中期目標を設定し事業場ごとの実行を推進する。

● 防火防災において、本社との連携など、より実態に即した訓練を行い、対応力の強化を図る。

● 交通安全において、事業部ごとの施策を実行することで、2013年を最終年度とした中期目標を達成する。

フィジカル、メンタルの両面から全社員を対象とした健康調査および診断を行った。調査・診断結果を活用した改善への取り組みと、社員の自律的な健康づくり行動を推進した。



● 健康診断やストレス調査により、健康上のリスクの早期発見と治療を支援する。

● 社員の健康に関する教育や情報提供を充実させる。

### 交通安全への取り組み

交通安全は社員だけでなく一般生活者の安全を確保するうえでも重要な活動と位置付け、取り組んでいます。営業職の新入社員は、毎年、企業ドライバーとして安全に運転できるよう運転技能判定と結果に応じたトレーニングを実施しています。2012年度も新入社員全員が一定レベルに達して社内免許を取得、赴任先での安全運転に努めています。

また、毎年全国の営業職が、大阪府警察本部などが主催する「東淀川地区無事故・無違反チャレンジコンテスト」に参加し交通安全の向上に努めています。2012年度は73グループ554人が参加し、22グループでエントリーした全員が無事故・無違反を達成、個人別には400人が無事故・無違反を達成し、SDカード\*を授与されました。

\*SDカード = 1年以上無事故・無違反であるときに発行される証明書 (SD=Safe・Driver)



「東淀川地区無事故・無違反チャレンジコンテスト」スタート式の様子

### 社員の健康増進を図る

#### ドライアイをテーマに衛生講話を開催

全国労働衛生週間に合わせて、2012年11月に本社地区に勤務する社員を対象として衛生講話を開催し、約450人の社員が聴講しました。講師には慶應義塾大学 眼科学教室教授 坪田一男先生をお招きし、「ドライアイ」をテーマに、「ドライアイとは何か」をわかりやすく解説いただきました。また、2011年にドライアイ研究会が当社社員を対象に実施したドライアイ検診結果についても大変興味深い内容としてフィードバックいただきました。（本検診結果は、国内外の学会でドライアイに関する新しい話題として発表され、専門医をはじめ一般臨床医からも注目を集めています。）

当日の様子はテレビ会議システムにより複数の事業場にリアルタイムで中継したほか、講演後は社内イントラネットを活用した動画配信により全国の社員が視聴し、目の健康に関する理解を深めました。



ドライアイ講演会風景

# V 労働・安全衛生 / VI 環境保全

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動
人材の育成	能力開発とキャリアアップの機会を提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●グローバル人材育成のための能力開発の実施とキャリアアップ機会を提供した</li> <li>●階層別・課題別研修を実施した</li> <li>●障がい者の技能向上を図った</li> </ul>
地球温暖化防止	CO <sub>2</sub> 削減に向けた取り組みを推進する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●省エネルギー推進によるCO<sub>2</sub>削減に取り組んだ</li> <li>●政府要請に応じた節電対策を実施した</li> </ul>
ゼロエミッションへの取り組み	環境汚染の予防と廃棄物の削減を推進する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●化学物質を適正に管理し、排気・排出基準を遵守した</li> <li>●廃棄物を適正に処理した</li> <li>●廃棄物に関する3R(リデュース、リユース、リサイクル)を推進した</li> </ul> <small>※事業場ごとの実績などについては、コーポレートウェブサイトに掲載している「Environmental Data Book」をご覧ください。</small>
環境保護	環境保護活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●事業場周辺の美化活動を実施した</li> <li>●森林保護活動を実施した</li> </ul>

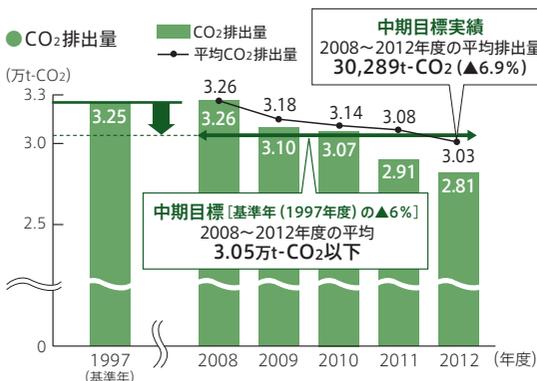
## Do 2012年度活動ハイライト

### 地球温暖化防止

CO<sub>2</sub>削減に向けた取り組みを推進する

#### CO<sub>2</sub>削減中期目標を達成

2012年度は、2008～2012年度の5カ年平均CO<sub>2</sub>排出量を1997年度の6%減とする中期目標の最終年度でした。主に高効率機器の導入やエネルギー転換などの省エネルギー推進や、全国的な電力不足に対応するために、オフィスも含めたすべての事業場で節電対策に取り組みました。その結果、単年度のCO<sub>2</sub>排出量は28,082t-CO<sub>2</sub>と前期に比べ3.4%削減となり、5カ年平均では30,289 t-CO<sub>2</sub>で1997年度の6.9%減と中期目標を達成しました。



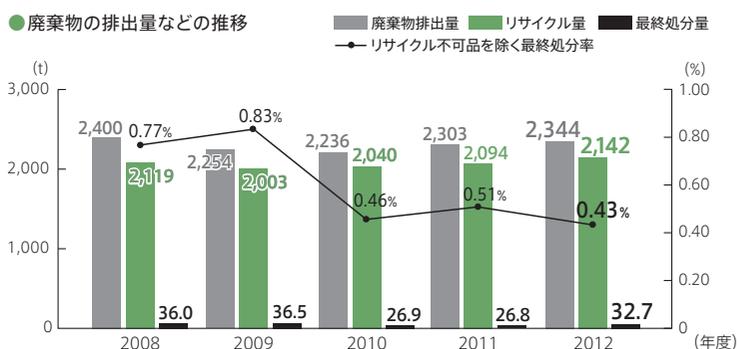
### ゼロエミッションへの取り組み

環境汚染の予防と廃棄物の削減を推進する

#### 3R推進による廃棄物の削減

当社は、廃棄物の発生抑制や廃棄製品のリサイクル化など、3R(リデュース、リユース、リサイクル)の推進に取り組んでおり、2006年度以降はリサイクル不可品を除いた廃棄物の最終処分率1%以下とする当社目標を継続して達成しています。

2012年度は、生産量の増加や事業活動の拡大などに伴い、廃棄物排出量と最終処分量は前年度より増加しましたが、徹底した3Rの推進の取り組みによりリサイクル率は向上しました。



Check 自己評価

Action 次年度の活動方針

<p>階層別研修と課題別研修により能力開発を行うとともに、人材アセスメント結果などから、グローバルな異動も含めた人材配置によりキャリアアップ機会を提供した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● これまでの研修プログラムを見直し、職務、職位ごとに求められる人材と育成計画を一致させた人材育成計画を検討する。</li> </ul>
<p>2008～2012年度のCO<sub>2</sub>平均排出量目標（対1997年度比6%減）を達成した。 政府要請の節電目標を達成した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● CO<sub>2</sub>排出量を2020年度までに2005年度の23%削減を目標とし、中期実行計画に沿って事業場ごとの活動を推進する。</li> </ul>
<p>マネジメントシステムの運用により、化学物質、廃棄物に関して法遵守も含めて適正に管理・運用した。 廃棄物の総量は増加したものの、事業場ごとの取り組みによりリサイクル率は向上した。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 化学物質、廃棄物の適正管理を維持・継続する。</li> <li>● 廃棄物に関しては中期実行計画を策定しゼロエミッションを目標に取り組む。</li> </ul>
<p>地域社会への貢献意識向上により、大阪本社、能登工場、滋賀工場、奈良研究開発センターの各事業場において、周辺地域の美化活動への参画がより活発になった。</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 事業場周辺の美化活動を継続する。</li> <li>● 各事業場の立地地域とのさらなる連携により、環境保護活動の充実化を図る。</li> </ul>

環境保護

環境保護活動を実施する

事業場周辺の美化活動

地域の環境美化に貢献するために事業場周辺の美化活動などを行っています。本社地区では6月に事業場周辺の清掃、滋賀工場では地域の自治会や団体と協同で6月に多賀町立図書館およびその周辺、10月に工業団地の歩道および四手公園、11月に多賀町芹川の清掃、能登工場では6月に宝達山と白虎山公園の草刈り、8月に千里浜海岸の清掃、10月に白虎山公園周辺の草刈りを実施しました。奈良研究開発センターでは生駒市の富雄川環境美花推進協議会が開催する「富雄川クリーンキャンペーン」に参加し、6月に草抜き、10月に菜花の

種まき、2月にパンジーの苗植えを実施しました。これら地域の環境美化活動に2012年度は延べ339人が参加しました。

また、海外子会社の参天中国蘇州工場では、11月に工場周辺の清掃を実施し70人が参加しました。

森林保護活動

能登工場のある宝達志水町教育委員会が主催し、町の象徴である宝達山の自然を守るための環境教育事業として実施している宝達山の「記念植樹」と「クリーン登山」への協賛を通じて森林保護活動を行っています。

2012年度は雨の影響により、「クリーン登山」は中止となりましたが、「記念植樹」は10月に2回に分けて行われ、町内2つの中学校と宝達高校から合計約300人の生徒が参加しました。



滋賀工場：多賀町立図書館および周辺の清掃



参天中国蘇州工場：工場周辺の清掃



記念植樹の様子

# VII 社会貢献

中期活動テーマ	Plan 活動項目	Do 実践活動 <small>※詳細はコーポレートウェブサイトに掲載しています。</small>
事業分野における医療の発展と福祉の充実	患者さんへの貢献活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●眼科領域全般における疾患啓発活動を実施した</li> <li>●リウマチ患者さんの生活に役立つ情報などを提供した</li> </ul>
	医療関係者への貢献活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●眼科とリウマチ領域を中心とした研究活動に対する支援を実施した</li> <li>●眼科とリウマチ領域を中心とした研究者育成への支援を実施した</li> </ul>
	支援団体などへの貢献活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●支援団体主催活動へボランティア参加した</li> <li>●工場見学受け入れやスポーツを通じた支援団体との交流を実施した</li> <li>●支援団体などへ寄付した</li> </ul>
企業市民としての活動	地域貢献活動を実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地域と連携した交通安全・防火防災活動を実施した</li> <li>●地域の学生・生徒への出張講義を実施した</li> <li>●東日本大震災被災地域への復興支援活動を実施した</li> <li>●子会社において支援学校生徒の就学体験を受け入れた</li> </ul>

## Do 2012年度活動ハイライト

### 事業分野における医療の発展と福祉の充実

#### 医療関係者への貢献活動を実施する

#### 研究者育成への貢献

当社の奈良研究開発センターでは、隣接する国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学 (NAIST) との連携講座を開設し、大学院生を受け入れ、研究者・技術者教育に努めてきました。当社が運営を担当している「機能高分子科学研究室」(2005年開設)では、初年度より博士課程前期の学生2名を受け入れ、これまでに博士課程前期修了者7名、博士課程後期修了者1名を輩出しました。卒業生のうち、1名は他大学の博士後期課程に進学し、その他の卒業生はそれぞれ製薬、化粧品、化学系の企業に就職して主に研究開発の業務で活躍しています。

当研究室の教員は客員教授2名、客員准教授1名で構成され、さらに各専門分野に精通した社員が連携研究員として参画しています。教員はすべて奈良研究開発センターの研究員で、それぞれの専門性を発揮して学生の指導に当たっています。



研究室内での実験活動

#### 支援団体などへの貢献活動を実施する

#### 患者さんや視覚に障がいのある方々との接点づくり

当社は、病気が患者さんに及ぼす影響や患者さんの抱えておられるお悩みを知ることが、優れた製品やサービスの開発と提供につながると考えています。一方で、社員一人ひとりが患者さんと直接お話をすることは多くありません。このことから、患者さんや視覚に障がいのある方との交流、支援団体の活動へのボランティア参加など、患者さんの声を聴かせていただく機会の拡充に努めています。

#### スポーツを通じた交流

滋賀県視覚障害者福祉協会主催によるグランドソフトボール<sup>※</sup>の試合に、当社の工場、本社、特例子会社クレールの社員や家族が参加し、全盲や視野が限られた状態で競技を体験させていただき、協会の皆さまや滋賀県立盲学校の皆さまと競技を通じた交流を深めました。



※グランドソフトボール＝ハンドボール位の大きさのボールを用いた、視覚障がい者用に考案された野球競技。全盲プレイヤーと弱視プレイヤーとによって、ハンディを設けるなど、工夫されている。

試合後、ともに競技を楽しんだ皆さんと

Check 自己評価	>>>
コーポレートウェブサイトのリニューアルを機に、患者さんや一般生活者の方向けの情報を見直し充実させた。 多様な媒体やさまざまな機会を通じ、患者さんの疾患啓発に役立つ情報を提供した。	○
大学をはじめとした医学・薬学研究への助成、学会への寄付、研究会開催による最新情報交換の機会創出などを行い、医療の発展に寄与した。	○
主要事業場の立地地域（大阪、滋賀、奈良、石川の各府県）において、視覚特別支援学校、視覚障がい者団体、支援団体との交流、大会などへのボランティア参加を行った。	○
地域関係団体と連携して「全国交通安全運動」など積極的に活動できた。 地域と連携して、防火防災などの向上に取り組んだ。 支援学校生徒の就学体験に積極的に協力し、人数が近年では最多となった。	○

Action 次年度の活動方針
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 疾患の早期発見・早期治療に役立つ啓発活動を充実させる。</li> <li>● 継続的に、患者さんのQOLの維持・向上のための情報・サービスを提供する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 当社の事業領域である眼科とリウマチ領域に特化した、医学・薬学ならびに、医療の発展につながる支援活動を継続的に実施する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 視覚に障がいのある方や支援している人たちと社員との交流機会を拡充する。</li> <li>● 視覚障がい者団体などへの支援活動を通じ、事業分野に関わる福祉向上策に寄与する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域関係団体との連携をさらに強化し、多方面での活動を拡充する。</li> </ul>

### 貢献活動を通じた交流機会の拡充

昨年8月、大阪で開催された「全国盲女性研修大会」に、本社と奈良研究開発センターから延べ30名強の社員が、視覚に障がいのある方の手引き（誘導・案内）役として参加させていただきました。

本年3月には、金沢駅周辺にて能登工場の社員有志7名が、石川県立盲学校、石川県視覚障害者協会が催された「点字ブロック理解・啓発活動」に参加し、活動しました。参加者全員が「3月18日は、点字ブロックの日です」、「点字ブロックは視覚障がい者の方にとっての大切な道しるべです」、「点字ブロックの上に物を置かないようご協力お願いします」と通行人の皆さまへ積極的に声をかけ、啓発メッセージが記されたポケットティッシュを配布しました。活動終了後には他の参加者の方々と交流機会を持ち、目薬の識別性の向上に関するご要望なども頂戴しました。



腕を持っていただき、先導・案内する



道行く方々に声をかけ、協力を呼びかける

### 企業市民としての活動

#### 地域貢献活動を実施する

#### 春の全国交通安全運動期間中の地域と連携した活動

2013年度「春の全国交通安全運動」は、4月6日から4月15日までの日程で実施され、大阪市東淀川区でも東淀川警察署、東淀川交通安全協会を中心として、シートベルト・チャイルドシートの着用、二輪車の安全運転、自転車の交通ルール・マナー向上、高齢者の交通安全などの啓発活動が展開されました。

当社は東淀川交通安全協会の一員として、地域の活動にも積極的に参加しています。期間中に実施された「めいわく駐車クリーン作戦」では、参天製薬本社前に東淀川警察署などから関係者が集まり、地区の交通事故発生状況などの情報を共有。その後、安全運転管理者部会の皆さまと一緒に地域の企業・事業所を訪問して迷惑駐車追放の啓発活動を行いました。



春の交通安全運動での様子

# ステークホルダーダイアログ

## 「真の顧客志向」の追求とCSR

### 「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」に求められる社会的責任

参天製薬グループでは、「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」の実現に向けて、CSR実践活動の充実が不可欠だと考えています。そこで、2011年にCSR統括部を設立するとともに、CSR委員会を再編。委員会を核にCSRマネジメントを推進し、全社員のCSRに対する理解促進・浸透を図ってきました。新体制から2年目を迎え、CSR委員会から5人のメンバーが集まり、社内の意識の変化や今後への課題について意見を交換しました。



企画本部 契約法務チーム チームマネージャー

井上 雅朗

法務面からの事業支援、契約リスク管理、契約法務チームのマネジメント等を担当



財務・管理本部 法務グループ グループマネージャー

谷 成人

全社的な法対応状況の確認・整備など、法務全般を担当

### 経営と一体のCSR

#### ——基本理念が組織にもたらしている力

**青山** 当社は「天機に参与する」という基本理念のもとで、経営とCSRは不可分であるという考え方に触れる機会が多いと思います。しかし、その意識がどの程度浸透しているかとなると、まず私たちにとってCSRとは何かということを確認する必要があります。所属部門や担当する業務によっても捉え方は異なると思います。私は、CSRとは、企業が収益の源泉でもある社会との共存に向け、常に顧客視点を忘れずに経営していくことだと考えているのですが。

**國廣** 信頼性保証本部に関して言えば、高品質で有効性と安全性のバランスに優れた製品を安定的に供給できるように他部門とも協働しながら信頼性を確保するのが私たちの使命。CSRの7つの推進中核領域でいうと適正な製品・サービスの提供に大きく関与しています。他に環境や労働・安全衛生の企画推進面も担い、最近では法令遵守についても法務グループと協働しています。

**朝日** 研究開発本部は、モノではなく、医療に対しての解決策、ソリューションを創造しています。「世の中に求められている価値ある創薬という観点で医療ソリューションを提供していく」これが当本部に求められているCSRなのだと思います。

**谷** 私たち法務グループは、コーポレートガバナンスを主と

して社内サービスを提供するセクションです。CSRにおいては、社内での法令遵守などへの貢献を図るという役割を担っています。

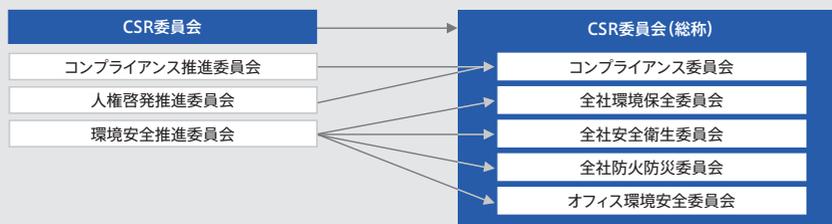
**井上** 契約法務チームの一員として契約書の起案やチェックを担当しているので、法令遵守には直接関係しています。方針の決定や契約行為の遂行を担うのは事業部や担当部署ですが、契約書を通して、企業として最低限正しいか間違っているかを判断し、誤りに歯止めをかけるための一定の基準は私たちが持つべきだし、研ぎ澄ませていかなければならないと思っています。

**國廣** 部門ごとに役割は違っても、当社では確かにCSRが事業と一体となって根付いている。私個人の経験を振り返ると、外資系の会社から参天製薬に移ってきた当時、参天製薬の理念を改めて浸透させようということで各種プロジェクトが立ち上がっていました。前の会社ではなかったことなので感銘を受けたのを覚えています。共通の理念のもと、行動に責任を持ち、患者さんのためにより良い製品を届けということが浸透した、良い取り組みだったと思います。

**朝日** 私も以前勤めていた会社では、ビジョンは鮮明でしたが、理念は無きに等しかった。ですから当社に入社した際、「天機に参与する」という理念に込められた深い思いや、それが社名の由来にもなっていることなども、大変印象的でした。最近ではあらためて、基本理念とは業務にそのまま表れて

● CSR委員会の再編  
(2011年10月)

実状に適した委員会に再編し、より実効性を高めるため、「CSR委員会」と3つの推進委員会を、5つの委員会に再編し、「CSR委員会」は5つの委員会の総称とした。



研究開発本部 研究開発業務室 室長

**朝日 基雄**

研究開発業務の支援や奈良研究開発センター施設管理など研究開発本部の総務全般を担当



信頼性保証本部 信頼性保証・企画推進室 室長

**國廣 英一**

信頼性保証に関する企画推進ならびに治験等の信頼性保証を担当



財務・管理本部 東京支店 理事 支店長

**青山 晴人**

主に医薬、薬粧の業界関連業務を担当

くるものではなく、何かあった時に立ち戻るものなのだと、いうことが自分でも実感できるようになりました。考える度に解釈も深まって、これだけ歴史が長い会社が掲げている理念の深遠さを再認識しているところです。

**井上** しかし、余りに何もかも基本理念に結びつけると本質が見えにくくなりませんか。会社は、どんな経営理念を掲げていようとCSRに取り組まなければならない。理念がこうだからというよりも、なぜCSRが必要なのかということが最初にあるべきです。そのことは忘れてたくありません。

**青山** 当社も以前は特に基本理念を掲げてはいなかった。でも、例えば専門分野に特化するといった考え方は古くからあった。それを明文化して、社員に対してメッセージ化したのが、今の基本理念だと思います。確かに基本理念がどうあるとCSRは大切ですが、当社はこの基本理念の力で、経営とCSRを一体化して進めていくことができているように思います。

**谷** 基本理念が明文化される以前の当社は、今とはかなり違っていました。私が入社した1983年当時はまだ規模も小さく家庭的な会社で、理念を明文化しなくても一定の水準で共有化ができていた。それが、会社が大きくなり社員の価値観も多様化して、方向性なり考え方を一つにつなげるメッセージが必要となって、基本理念が生まれてきたのでしょうか。当然、当社にとって無くてはならない大切なものだと思います。

「世界で存在感のある  
スペシャリティ・カンパニー」の条件

**青山** かつての家庭的な風土というのは、もちろん魅力的ですが、それは一方で甘いという見方もできます。ある時を境に理念がきちっと明文化されたことの裏には、今まで通りではいけない、会社としてグローバルに発展していくためには、企業風土を変革し、引き締めなければならないという意味もあったのだと思いますね。

**國廣** その思いから参天企業倫理綱領ができ、さらにそれをもとにCSR方針が定められて、現在のCSR活動へとつながっている。倫理綱領については今また再浸透を図る必要があると考えており、コンプライアンス委員として取り組んでいきたいと思っています。こういうことを、定期的にPDCAを回すような形で続けていくのが理想ですね。

**朝日** 研究開発ではグローバル化が待ったなしで進んでいます。一つ海外で臨床試験をするだけでも、その国での医療・薬事制度を熟知しなければなりません。他にも環境、労働・安全衛生や利益相反などCSRの視点から最低限守らなければならないことは何か、どう業務を進めていけばいいのか、まだ手探りの状態です。

**井上** めざすは「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」ですから、プレッシャーがかかりますね。



**朝日** 確かに。一刻も早くその国の環境を知り、こういうことが社会にとっていいよね、こうするべきだよ、というところを踏まえた上でやっていけるようにならなければ。道は険しいと思いますが、志を持って経験を積み、必ずどの国でも存在感のある、信頼される企業になれると考えています。

**國廣** 信頼性保証本部は、コスト競争力を高めながら品質を維持するという二律背反の課題を背負っています。そのためにサプライチェーンをグローバルに広げていかなければなりません。その時にCSRポリシーが欠かせません。社内では2年くらい前から整備されてきましたが、ビジネスパートナーも同じようなレベルでポリシーを持っていないと、提携もできないし、受託も受けられなくなるでしょう。

**青山** それは、確実な安定供給を図るためですか？

**朝日** もちろんそれもあるし、サプライチェーン全体でのCSRへの取り組みを求める声世界的に高まっているという背景もあります。とにかくハードルが高いので、強い危機感をもって、CSR統括部と手を携えながらグローバルレベルでの展開を進めていきたいと思っています。CSRがグローバル化を支え、そのグローバル化がさらなるCSRの進展を促しているわけです。

**谷** 財務・管理本部でも、財務経理グループは連結決算で子会社と連携を行う、法務グループは子会社の一定額以上の

決裁について関与するなど、世界中のグループ会社と関わっている。参天製薬グループ全体が、世界中の眼科医療の分野で、患者さんと患者さんを愛する人たちにとって価値のある企業になることをめざしている。存在感を示そうとしている。そんな大きな変化の中では、部門に例外はありません。

## 「真の顧客志向」の実践と参天製薬の社会的責任

**國廣** 以前、CSR活動推進の一環として、本部内で自分たちの基本使命を各組織単位で明文化する際、自分たちにとって顧客とは誰かを議論しました。この時にいろいろ意見が出ましたが、参天製薬として患者さんと患者さんを愛する人たちに寄り添って初めて、自分たちの仕事も実を結ぶのだという認識を共有できたと思います。

**朝日** 私たちのグループは研究開発部門の総務機能として、臨床開発モニターなど前線でドクターとやりとりをする本部員を後方支援しています。以前は、直接顧客とか間接顧客とかいような言い方をしていました。それを社内の支援先部署をサービス提供先と呼ぶようにし、顧客という言葉を使うときは必ず「患者さんと患者さんを愛する人たちを指す」ということを意識しました。そうすることで顧客という言葉に触れるたび、自分たちの仕事と、患者さんと患者さんを愛する



### ● CSR統括部の機能と各委員会運営

基本機能	7つのCSR推進中核領域	機能	委員会運営		
参天企業倫理綱領の浸透・定着	—	基本理念と連携した倫理綱領の浸透と定着			
CSRマネジメントシステムの構築推進	適正な製品・サービスの提供	3つの領域における社員の行動に起因する倫理・法令等の遵守推進 (人権啓発、プロモーションコード、下請法などの遵守)	CSR委員会	コンプライアンス委員会	
	公正な事業取引				
	人権尊重				
	環境保全	環境マネジメントシステム推進			全社環境保全委員会 オフィス環境安全委員会
	労働・安全衛生	安全衛生マネジメントシステム推進 防火防災マネジメントシステム推進 交通安全推進			全社安全衛生委員会 全社防火防災委員会 オフィス環境安全委員会
	社会貢献	社会貢献活動の立案・実施			—
	CSRマネジメント	機能ごとのマネジメントシステムの構築推進	CSR委員会	5つの全社委員会	
危機管理の強化・運営	—	危機管理委員会運営 BCM立案運用(BCP含む)	危機管理委員会	危機対策委員会 危機評価委員会 事業継続マネジメント委員会	

人たちとのつながりを意識するきっかけになっています。

**谷** 法務グループに顧客と直接接するような仕事はほとんどありません。しかし、会社が大きくなって社員の価値観も多様化する中で、誰を向いて動くのかという点を全社で一致させておくことは大切です。患者さんと患者さんを愛する人たちのためにという表現は参天製薬の理念を表す言葉として個人的にも好きだし、全社員がそちらを向いて、その期待や要望に応えていくべきだと思います。

**井上** とはいえ、私の担当する契約法務の現場では、会社にとって何が一番いいことなのかという視点で任務を遂行している。常に、患者さんと患者さんを愛する人たちに想いを馳せることの難しさは当然あるわけです。今後は、CSRやコンプライアンスの中でどのように顧客志向を貫くのかをさらにブレークダウンして考え、しっかり整理しておく必要があると感じています。

### CSR活動の充実に向けた提案

**國廣** 今後は、会社として、ポリシーなどの決定を推進していくのはどこなのかを、より明確にすることが大切です。グローバルな調達ポリシーなどの決定が急がれており、その体制を早く構築していただきたい。例えば、製造委託の際、どんなCSRポリシーを相手先に求めるべきなのか。それによって契約内容も変わってきますから。

**朝日** まず必要なのは、いい意味での危機感だと思います。眼科・リウマチ領域に特化した医薬品企業として存続していくには何が必要か？ 個々が危機感を持てば国内外の部門間連携も強まるはずですし、自然と一丸となって進んでいくはずです。その根底には、社会に認められ存続していくという観点でCSRの意識と実践が不可欠です。一人ひとりがCSRを意識・実践していくためには、参天製薬グループ全体でもっとシステムチックに浸透を仕掛けていくことが必要で、その仕組みづくりと推進をCSR統括部をお願いしたい。



**谷** やっぱり個別最適的な話がまだまだ多いかなと思います。自部門中心ではなくて、全体的な考えの中で、一つステップアップしませんかというようなことを投げかけて、CSRの7つの推進中核領域などを見ながら議論していくような機会が持てれば、有効なのかもしれません。

**井上** 全社的な方針の明確化、ブレークダウンでしょうか。例えば事業に関しても、「2020年度までの経営ビジョン」でゴールに到達するために、まず次の目標として何をめざすのかというような細部があれば、もっとドライブがかかるのではないのでしょうか。CSR方針に関しても、一般論、理想論でなく、具体的に“当社はまず、これをやります”というのがあれば、自分として何をしたらいいかというのをもう少しイメージしやすくなるのではないかと思います。

**青山** CSRというと社会貢献をイメージしがちです。しかし本質は、会社がある規模を超えると、社会に認められながら存続していくことが求められるからこそ必要となる、すべての事柄を指す大きな概念です。当社も、単に適正な製品とサービスだけを提供していればいいのではなく、法令を守り、環境問題に取り組み、人権や社員の安全衛生も考えなければならない。そう考えると、7項目のCSR推進中核領域への理解も深まります。職場の一人ひとりに、そういう考え方の根本をわかりやすく伝えていくことがますます大切ですね。



2013年7月12日 新本社(大阪市北区)にて

# 中期活動方針

2011年度より、ISO26000を参考に参天製薬グループにおけるCSR(社会的責任)の考え方を「CSR推進概念」「CSR推進中核領域」として再定義し、マネジメントシステムの構築を完了しました。

今後は、以下に掲げた「中期活動方針」に沿ってPDCAサイクルを確実に回すことで、CSR活動の充実を図っていきます。



CSR推進中核領域(詳細P18)

CSR推進中核領域	中期活動テーマ	中期活動方針
CSRマネジメント	CSRマネジメントシステムの構築と円滑な運用	<ul style="list-style-type: none"> <li>●事業分野に関わる患者さん、視覚に障がいのある方、医療関係者の方々とのダイアログの企画など、ステークホルダーエンゲージメントの確立に向けた活動に注力する。</li> <li>●求められる製品を着実にお届けするために、世界各国・地域ごとのニーズに応じた製品開発を強化する。</li> <li>●継続して研究・開発における倫理への十分な配慮を行うとともに、製品の品質は最優先課題との認識のもと、グローバルでの信頼性保証システムを強化する。</li> <li>●社員一人ひとりのさらなるコンプライアンス意識、人権尊重意識醸成のため、啓発・研修活動を継続的に見直し実施する。</li> <li>●社内にとどまらず社外の取引先に対しても、コンプライアンス確保・人権尊重確保のための、デューディリジェンスの仕組みを整備・運用する。</li> <li>●安全で働きやすい職場の維持・向上のため、社員の安全確保・健康増進に継続して取り組む。</li> <li>●組織力の強化と働きがいのある職場づくりをめざし、人材育成プログラムの見直し・強化と、仕事を通じた成長機会の提供をより一層強化する。</li> <li>●2020年度を目標としたCO<sub>2</sub>削減に向けた活動、ならびに、廃棄物のゼロエミッションに向けた取り組みを着実に推進する。</li> <li>●医療の発展と福祉の充実に向けて、引き続き医学・薬学分野への貢献活動を行うとともに、患者さんや支援団体への貢献活動を強化する。</li> </ul>
	ステークホルダーエンゲージメントの確立	
適正な製品・サービスの提供	優れた製品の開発と提供	
	製品・疾患に関する情報・サービスの提供	
公正な事業取引	コンプライアンス意識の醸成	
	事業活動におけるコンプライアンス確保	
人権尊重	人権尊重意識の醸成	
	事業活動における人権尊重	
労働・安全衛生	公正な労働の確保	
	安全衛生の確保	
	人材の育成	
環境保全	地球温暖化防止	
	ゼロエミッションへの取り組み	
	環境保護	
社会貢献	事業分野における医療の発展と福祉の充実	
	企業市民としての活動	

## 編集後記

本誌、「CSRレポート2013」は、当社のCSRへの考え方と取り組みをステークホルダーの皆さまにご理解いただけるように心がけながら制作いたしました。今回のレポートで工夫した点は、ISO26000を参考とした当社独自の「CSR推進フレームワーク」に沿って、1年間の活動を振り返り、次の活動への展開をPDCAサイクルの形でご報告させていただいた点です。誌面の制約もあることから、すべての活動をご紹介することができませんが、当社の活動をよりタイムリーに報告させていただけるように、参天製薬ウェブサイトにてCSRのページを新設しました。サイトでは詳しい内容を掲載しておりますので、こちら併せてご覧ください。(http://www.santen.co.jp/ja/csr/)

最後に、特集記事、ステークホルダーダイアログ、第三者意見など、多くの方のご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。



CSR統括部「CSRレポート2013」編集担当  
(左から)服部 宙明、井上 雅央、今田 真

## 第三者意見

### 経営理念を反映させたCSR活動

参天製薬のCSR活動の大きな特徴は「天機に参与する」という企業理念とCSR活動を融合していることにあります。企業理念は抽象的なものではありませんが、抽象的だからこそ、具体的な活動の場面で幅広く意識することができます。これは目に見えない企業文化ですが、CSRのような社会に向けての活動を推進するうえで非常に大切なことです。その精神の下で、患者に対する貢献を全面に出したCSR活動は大変好感が持てます。また、視覚障がい者への支援を熱心に行われている点も、主力事業分野の関係からみて、非常に重要なことと思います。

### 体系的なCSR活動

参天製薬では、自社の企業倫理綱領をISO26000に即して検討し、CSR推進中核領域を確立しています。これはISO26000をそのまま導入するのではなく、自社に適した形へ転換して導入するという工夫が加えられたもので、実践的な意義があります。さらに具体的なCSR目標に対して、PDCAサイクルに基づく活動が行われており、この点は体系的なCSRマネジメントが実施されていると高く評価できます。報告書においても、各活動のPDCAの内容が明確に開示されていて、大変わかりやすくなっています。また、より詳しい情報をwebに移し、報告書では重要事項に絞って開示されている点も、企業が何を重視しているかが明瞭になって、良い試みと思います。



神戸大学大学院  
経営学研究科教授

### 國部 克彦氏

大阪市立大学大学院修了。博士(経営学)、大阪市立大学、神戸大学助教授を経て、2001年より現職。近著に、『環境経営意思決定を支援する会計システム』(中央経済社)、『環境経営・会計』(有斐閣)などがある。

### マテリアリティ分析からKPIの開発へ

このように参天製薬では、企業理念に基づく体系的なCSRマネジメントが実施されており、CSR活動として高いレベルにあると言えます。次の課題は、世界的に注目されているマテリアリティ(重要性)分析とKPI(Key Performance Indicator)の開発だと思います。マテリアリティ分析に関しては、すでに報告書とwebでの情報を分離している点で、ある程度意識されていると思いますので、今後は様々なステークホルダーの意見を定期的に取り入れて、各活動の重要度を見直していかれることをお勧めします。KPIについては、PDCAに基づくCSRマネジメントを導入されているのですから、そこで数値化することによって、活動が促進される活動があれば、そのような分野から試行されることが現実的と考えます。また、社会から企業へのニーズは絶えず変化しますので、新しいCSR課題についても積極的に取り組んでいかれることを期待しています。

## 第三者意見を受けて

当社「CSRレポート2013」に対する第三者意見として、神戸大学大学院経営学研究科教授 國部克彦様よりご意見を頂戴いたしました。國部先生には大変お忙しい中、本レポートをご精読いただき、貴重なご意見をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

当社は2020年に向けた経営ビジョンを掲げ、「世界で存在感のあるスペシャリティ・カンパニー」の実現をめざしています。その実現のためには、CSRと一体となった経営が必要不可欠であり、基本理念と社会的責任に関する国際規格ISO26000から落とし込んだ「CSR推進概念」に沿ってCSRマネジメントを確実に実践することが重要であると認識しております。今後におきましては、國部先生からご提案いただきましたマテリアリティ分析とKPIの開発にチャレンジし、より効率的・効果的な活動に拡大・発展させ、持続可能な社会・環境への貢献に努めてまいります。



人材組織開発・CSR本部  
理事 CSR統括部長

### 川畑 裕一



**連絡先**

**人材組織開発・CSR本部 CSR統括部**

〒533-8651 大阪市東淀川区下新庄3丁目9番19号

TEL.06-6321-7011 FAX.06-6321-7196

<http://www.santen.co.jp>

下記の販売名は、提供会社の登録商標です。  
「タリビッド」(第一三共株式会社)、「アザルフィジン」(ファイザー・インク)、  
「アイリーア」(バイエル アクチエンゲゼルシャフト)

2013年9月発行

